

N
I
E

実 践 報 告 書

2020(令和2)年度



Newspaper in Education

群馬県N I E 推進協議会

N
I
E

実 践 報 告 書

2020(令和2)年度



Newspaper in Education

群馬県NIE推進協議会

Contents

ごあいさつ	群馬県 NIE 推進協議会 栗原幸正
「正確に読み取り、表現できる児童の育成」を目指すための NIE の活用 ～新聞に親しむ、慣れる、触れる活動を通して～	太田市立綿打小学校…………… 6
児童と「新聞」との関わりを強くする（指定2年目） ～新聞への「投稿」と新聞記者による「出前授業」を通して～	館林市立第八小学校…………… 10
新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成	沼田市立薄根中学校…………… 14
ものの見方や考え方を広げる機会に出会うために（継続2期目） —新聞に親しみ、活用する実践—	高崎市立第一中学校…………… 18
新聞を活用し、世の中をより広い視野で見ることのできる生徒の育成 ～生徒主体の NIE 普及活動を中心に～	嬭恋村立嬭恋中学校…………… 22
新聞を用いて実社会とのつながりを考える教科指導の取り組み	ぐんま国際アカデミー中高等部…………… 26
NIE 令和2年度の取組	群馬県立伊勢崎高等学校…………… 30
続 本校における NIE の取り組み	群馬県立吉井高等学校…………… 34
新聞を通して幅広い教養を身につけ 自分自身で深めることのできる生徒の育成	群馬県立高崎商業高等学校…………… 46



ごあいさつ

群馬県NIE推進協議会 栗原幸正
(高崎健康福祉大学人間発達学部 教授)

令和2（2020）年度の教育界は、まさにコロナ感染拡大に翻弄された1年とすることができます。公立学校の一斉休校が終了しても、学校行事の中止や延期、また分散登校など、毎日が非日常という1年であったと思います。そのような状況下にあっても、日本の教員たちは「学びの継続」を旗印に、児童・生徒の育成に真摯に取り組み、日本の教育の底力を国民に示した事を心からうれしく思うと共に、教員一人一人に大きな賞賛が与えられる事を心から願う次第です。

そして、特に注目すべきは、コロナ関連の不確かな情報がSNS等で多様に飛び交う中で、情報の信頼性と確実性を内包する新聞の存在意義はますます重要となり、新聞を教育に取り組むことの必要性が以前に比べ大きく増した事です。厳しい教育環境の中で、この実践報告書に示された、実践指定校のNIE充実に向けた挑戦は、今後の日本の新聞への関わり方の方向性を示す、確かな1歩となったとすることができるでしょう。

令和2年度は、実践指定校として、小学校2校、中学校3校、高等学校3校、中高等学校1校に、多彩なNIEの実践を繰り広げていただきました。コロナ感染防止への対応で新聞の置き場所に苦慮したり、あえて明るい記事に注目して実践を繰り広げたりと、各校でのNIEへの熱い思いを感じざるをえない実践が報告されております。ご協力いただきました関係新聞各社をはじめ、実践に臨まれた各学校の先生方や児童生徒、そして保護者や地域の皆様方に、心よりお礼申し上げます。

令和2年11月22日（日）に、第25回NIE全国大会東京大会がオンラインで開催されました。その中で行われた、「ウィズコロナ時代にNIEで培う力～ともに生き、つながるための資質・能力」と銘打った日本NIE学会と日本新聞協会の共同シンポジウムを通して、群馬県NIE推進協議会が実践指定校と地道に行う、児童・生徒と共に作るNIEが大きな意義を持つことを再確認した次第です。今後も、コロナ禍の影響は継続していくことが予想されます。その中で、「継続は力なり」という教育の特質を生かして、本協議会の活動がより広く、より意義深くなること確信しております。

「正確に読み取り、表現できる児童の育成」を目指すためのNIEの活用

～新聞に親しむ、慣れる、触れる活動を通して～

太田市立綿打小学校

小須田美枝子・新井 久雄

1. はじめに

本校は、群馬県の東部、鶴の首の付け根に位置する太田市の中で最も西部に位置し、豊かな田園風景と湧水や国指定館跡など歴史的な遺跡が点在する長閑な環境にある。全校児童数451人、19学級の小学校である。協力的な綿打地区の地域に開かれた学校づくりの核として、積極的な発信を心がけ、子ども達自身も自らの考えを表現する力を育成したいと考え、本年度より新規NIE実践校になり取り組んできた。

2. 実践の概要

本校の研修テーマである「正確に読み取り、表現できる児童の育成」をめざす一環として、新聞を授業に取り入れ有効活用し、読解力や表現力の育成とともに、読み比べたり投稿したりする活動を通して意欲の向上につなげたいと考えた。また、新聞に触れる機会を増やし、新聞に親しみそのよさを実感する場面を意図的に設けることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、感受性や発信力の育成にもつなげたいと考えた。

具体的には、次の3点を柱とした。

- (1) 新聞に親しむ・・・新聞への投句、投稿の奨励
- (2) 新聞に慣れる・・・新聞記者による出前授業、印刷センター見学
- (3) 新聞に触れる／活用する・・・国語科を中心とした授業での新聞の活用

3. 新聞の置き場所と整理の方法

子ども達の往来が多い職員室前の廊下にコーナーを設置し、7紙が届く間は、当日分を置き、誰でも自由に閲覧できるようにした。(写真1)1週間ごとにまとめて保管し、ひと月過ぎると整理棚に移動している。また、本校や綿打地区に関わる記事は、コピーを拡大して連絡通路に掲示している。休み時間には、関心をもって読む姿が見られる。(写真2)



【写真1:新聞7紙を置くコーナー】



【写真2:地域の記事を知ろうコーナー】

4. 実践の内容

- (1) 新聞への投句・投稿の奨励

児童が自分を見つめたり周りの事を意識したりして、自分の思いを発信する一手段として、俳

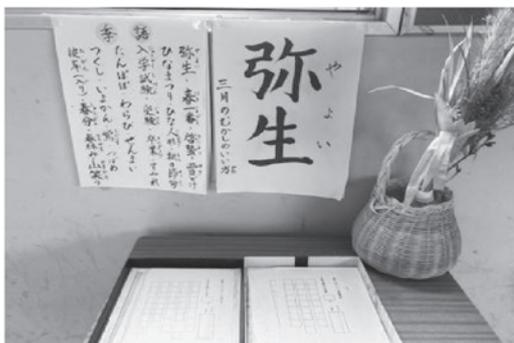
句・短歌の創作を奨励している。身の周りの自然や日常の一コマを切り取って表現する俳句は、どの学年でも取り組める創作活動であり、環境に恵まれた「郷土綿打」は格好の材料が豊富にある。俳句について学ぶ以前の1、2年生には、校長が「俳句に親しむ」授業を行った。

投句用紙(俳句・短歌)は校舎内各階においてある。(写真3)自由に持って行き、創作したら担任に提出し、校長がまとめ、上毛新聞の「ジュニア俳壇」「青春短歌」に投稿している。

また、表現力育成の手段として書き慣れることを目的に、学年に応じた量の文を書く機会を意図的に設けてきた。具体的には、学習の振り返りや新聞記事を元にしたワークシートなどがある。それらの作品も、上毛新聞「U22私の声」に投稿している。授業で書いたものだけでなく、日記や自主学習など、日常生活の中での素直な思いや感想なども投稿しているが、自分の思いや考えをまとめる力がついてきた確実な手応えを感じる。また、掲載されたことを家族や祖父母が喜んでくれたと報告があったり、記事を読んだ感謝の手紙が学校に寄せられたり、新聞に載る効果の広がりも実感している。

4月から新聞に掲載された作品を連絡通路に掲示しているが、友達の記事に興味深く眺める姿が見られる。(写真4) 作品を掲示した模造紙はどんどん長くなり20mを超えた。

また、作品が掲示された日の新聞を、校長が本人に手渡している。クラスみんなから賞賛され、他の子ども達の意欲喚起にもなり、切磋琢磨してよい作品を創ろうとする姿も見られる。(写真5)



【写真3:俳句・短歌用紙コーナー】



【写真4:新聞掲載作品の掲示】



【写真5:校長より作品掲載紙の贈呈】

(2) 出前授業、印刷センター見学

3年生が、総合的な学習「綿打たんけん隊」で、地域の史跡に出かけるのにあたり、メモの取り方を学ぶために、上毛新聞社のNIE担当の新聞記者に授業をお願いした。

記者は、子ども達が訪れる矢太神沼や江田館跡などを事前に周り、様子を画面に映し出しながら、見学のポイントやメモの取り方についての授業を各クラスで行ってもらった。

また、5年生は、社会科学習の新聞社の仕事についての理解を深めるために、伊勢崎市にある上毛新聞印刷センターへ見学に行ってきた。大きな機械やロボット、巨大トイ



【資料1:新聞記者による授業の記事】

レットペーパーのような紙など、子ども達は興味津々のよう
すで見学し、見てきたことを作文にまとめた。

教科書の上の知識を実際に目で見て確認することは、大き
な意義があり、このまとめも新聞に掲載された。

【写真6:印刷センター見学→】



(3) 国語科を中心とした授業での新聞の活用

① 1年生 「かたかな」

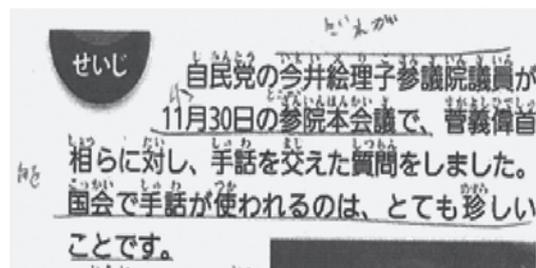
- ・ねらい：新聞記事の中から片仮名で書かれた言葉を見つ
け、片仮名を正しく読んだり、書いたりするこ
とができる
- ・本時の展開

学習活動	・教師の支援及び留意点
<p>【課題の把握】 1 新聞の扱い方を確認する (置き方、めくり方、畳み方) 2 本時の課題を知る。</p>	<p>・新聞の扱い方について振り返り、新聞を使った題材に興味をもてるよう にする。 ・本時の課題を説明し、一人一人が理解できるよう実際に手本を見せる。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">しんぶんをつかってカタカナさがしをしよう</p>
<p>【課題の追究】 3 新聞記事の中から片仮名で 書かれた言葉を見付け赤 鉛筆で丸を付ける。</p>	<p>・扱いやすいよう新聞の端をホチキスで留めておく。 ・例を示し、できるだけたくさんの片仮名を見付けられるようにする。 ・意味の分かる片仮名か分からない片仮名か意識して見付けられるよう声 を掛け、次の活動につなげられるようにする。</p>
<p>4 見つけた片仮名をワークシ ートに記入する。</p>	<p>・「イスラム」などのように言葉のまとまりを無視して丸を付けるこ とのないように、一つの言葉のまとまりに丸をつけられるよう伝える。 (例: 「イスラム」→× 「イスラム」→○) ・見つけた片仮名の中から意味の分かる片仮名と分からない片仮名を 区別できるよう、全体で確認し、意味の分かる片仮名をワークシート に記入できるようにする。 ・「ソ」や「ン」「シ」や「ツ」などのように誤りやすい字はよく見て 書くよう声を掛ける。 ・片仮名が未定着の児童には個別に声を掛け、書き写せるようにする。</p>
<p>【まとめ】 5 見つけた片仮名の数と、意 味の分かる片仮名を発表す る。</p>	<p>・見つけた片仮名の中から、意味の分かる片仮名を発表し、短文作りに生 かせるようにする。 ・意味の分かる片仮名を見付けられなかった児童には、友達の発表を聞いて、 出てできた片仮名を使って短文作りができるようにする。</p>



② 4年生「新聞記事のキャッチコピーを考えよう」
(特設单元)

- ・ねらい：記事の概要を理解し、それに見合っ
た見出しを考えることができる
- ・展開：新聞記事を要約し、キーセンテンス
やキーワードを元に「見出しを考える



【資料2:扱った新聞記事】

③ 5年生「情報ノート」をつくらう

- ・ねらい：必要な情報を明確にして整理することで、伝えたいことをわかりやすくま
とめることができるようにする。

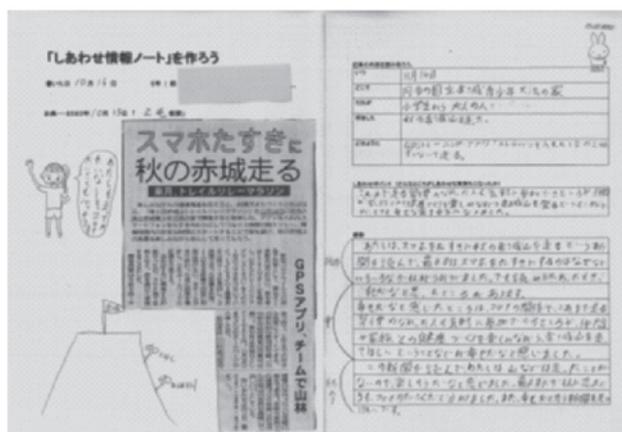
・本時の展開

学習活動	教師の支援及び留意点
1 前時の学習を想起し、本時のめあてを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・しあわせな気持ちになる記事について「情報ノート」にまとめるという記事選びの視点を確認する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">めあて 「しあわせ情報ノート」に自分の感想をまとめよう。</div>	
2 「情報ノート」にまとめる際に、記述しておくべき事項を確かめ、記事を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・日付、出典の他、5W1Hの抜き書きをすることで、記事の内容を捉えさせる。 ・記事を読んで、しあわせな気持ちになった部分に傍線を引かせ、感想の中心を捉えさせる。 ・分からない言葉は、国語辞典で意味を調べたり未習漢字は写真や見出し前後関係から意味を類推したりさせ、できるだけ自力で読み取らせる。
3 「情報ノート」に感想をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・記事の内容の要約と、読んだ感想をワークシートにまとめさせる。自力で書くことが苦手の児童には、書き方の例を提示して支援する。 ・早く書き終わった児童には、見出しを付け足したり色を付けたりして、記事をコラージュさせる。
4 できあがった「情報ノート」を発表し、感想を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・数人の児童に発表させ、感想を共有する。 ・ワークシートの感想を、新聞の意見文に投稿することを告げ、今後も継続して新聞を読む意欲付けをする。

5. 実践の感想と今後の課題

<授業から>

- 工夫次第で低学年でも新聞を扱えることが分かった。
- 教室に新聞を置いて自由に読める環境作り、新聞社発行のワークシート読み取り等の活動を通して、自分から新聞に親しむ児童が増えた。
- キーセンテンスをもとにキーワードを絞り込み、全体で共有した上で、記事の見出しを考える活動に取り組んだことは、児童が主体的に考える上で効果的であった。
- 記事から必要な情報を読み取ることが難しい児童もいたので、事前に同じ記事で読み取る練習をするなどの手立てが必要であった。



【資料3:しあわせ情報ノート】

<児童のアンケートから>

	7月	12月
国語の勉強は楽しいですか。	80.1	83.7
自分の考えを書いたり発表したりできましたか。	75.8	81.2
新しく知った言葉を使うことができましたか。	79.2	83.5

- アンケートは、校内研究の一環で取ったものであるが、各項目ともに肯定率が上がっており、書くことや語彙を広げることができている手応えを児童自身も感じている。新聞の活用は確実に影響を及ぼしている。



【写真7:児童作品掲示が22mに】

- より身近に活用するための方策や整理などは、今後の課題である。次年度は「親しむ」「慣れる」を継続しながら、国語科以外でも多角的に取り入れ、効果的な「活用」の方法についてさらに実践を深めたい。

児童と「新聞」との関わりを強くする(指定2年目)

～新聞への「投稿」と新聞記者による「出前授業」を通して～

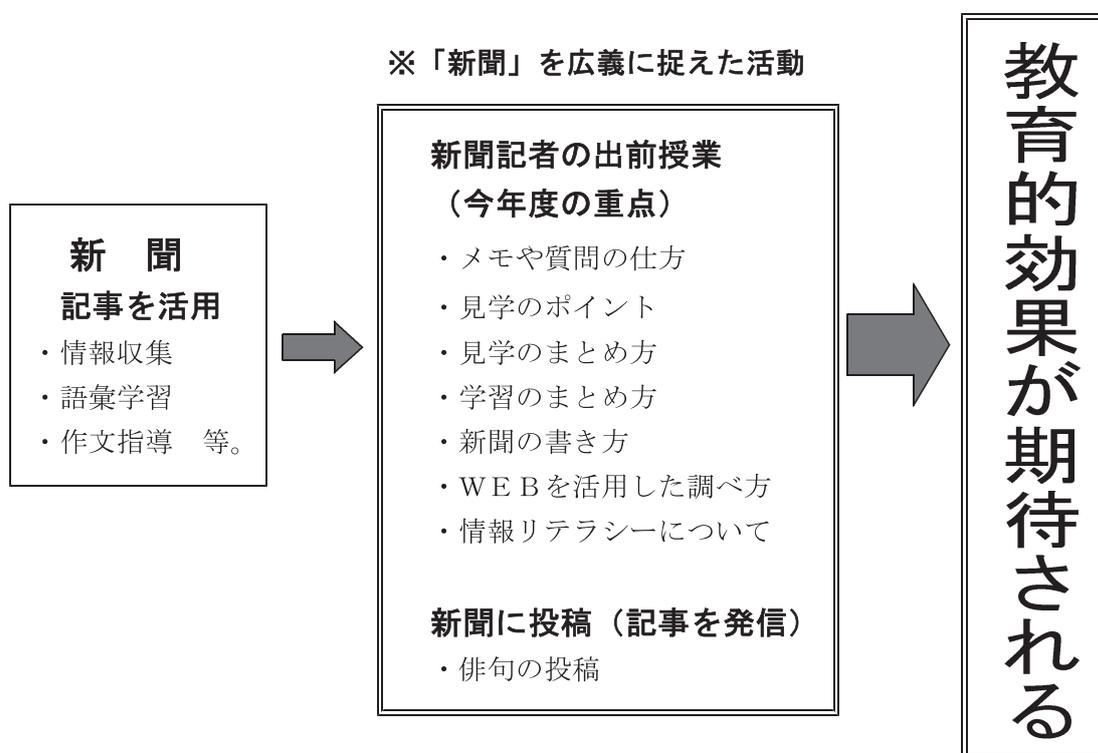
館林市立第八小学校 北村 聡

1 はじめに

本校は、群馬県の東部、館林市の西方に位置し、周辺には県内唯一の白鳥飛来地である多々良沼や松林、県立館林美術館などがある。児童数486人、21学級の小学校である。子どもたちの学習をより充実させるため、昨年度から継続して、新規NIE実践指定校になり取り組んできた。

2 実践の概要

NIEの可能性を切り開くため、「新聞」を広義に捉え、「新聞」を核とした様々な関わりについて、昨年度の内容を継続して実践を重ねた。子どもたちの学習をより充実させるため、群馬県の地方紙「上毛新聞」の記者を招いた「出前授業」を昨年度よりもさらに拡大して実施した。子どもたちが、社会科見学の前に取材の仕方を学ぶとともに、WEBを活用した調べ学習の手順や留意点を、現場の記者に専門的な知識を学ぶなど、事前学習等を充実させた。(下図)



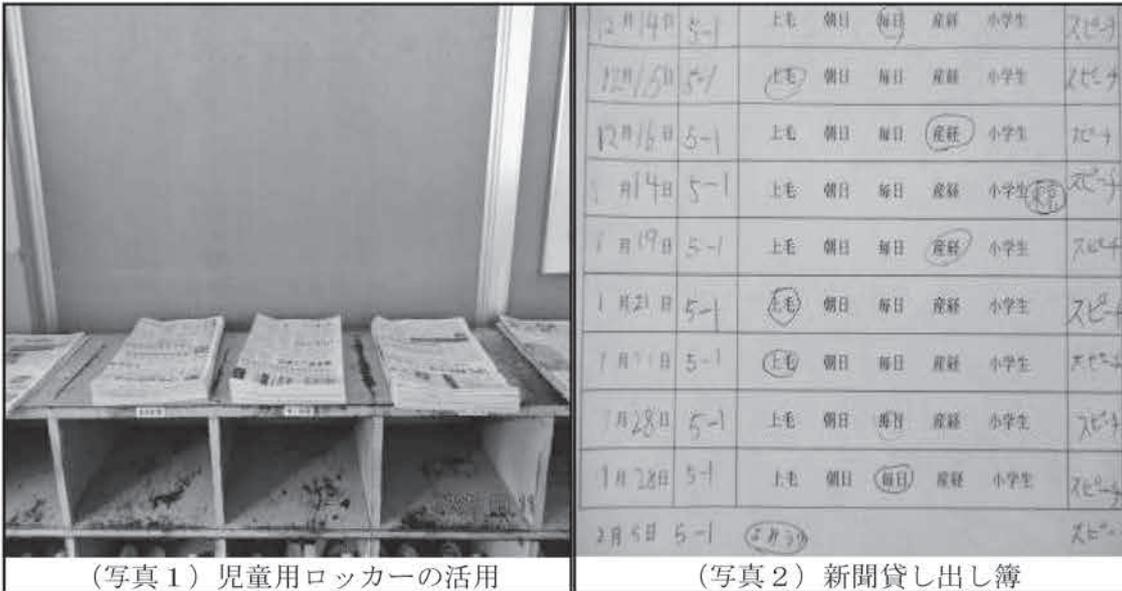
3 新聞の置き場所と整理の方法

(1) 新聞コーナーの設置

児童の往来が頻繁な職員室前の廊下に、新聞コーナーを設置した。教室で使う児童用のロッカーを活用して、整理している。(写真1)

(2) 新聞の整理

自由に新聞を活用できるようにするため、「新聞貸し出し簿」を用意し、教職員や児童が自由に新聞を借りられるようにした。主な貸し出し内容として、高学年による、朝や帰りの短学活での1分間スピーチに活用されていた。(写真2)



図書室内に新聞を掲示し、誰でも児童が自由に新聞を読めるようにしている。また、児童の興味・関心を高めるため、図書室の廊下に新聞コーナーを作り、常に新聞が児童の目に付くように工夫している。読み終わった新聞は、職員室前のロッカーに収納している。(写真3、4)



4 実践の内容

(1) 新聞記者による「出前事業」

子どもたちの学習をより充実させるために、専門家の力を活用する「出前授業」を、積極的に取り入れた。今年度は、4年生から6年生の3学年を対象に、10月と11月に3回、新聞記者を招いて「出前授業」を実施した。(写真5)

【4年生：修学旅行先の富岡製糸場の歴史について】

「富岡製糸場」について、写真やデータを活用して、歴史や文化等についてわかりやすく説明してもらった。修学旅行先では、ボランティアガイドの質問にもよく答えて褒められる等、事前学習の効果がうかがわれた。



(写真5) 専門家による「出前授業」

【5年生：足尾銅山について】

「足尾銅山」について、豊富な取材資料などを提示し、見学のポイント、メモや質問の仕方、見学のまとめ方等の授業を行った。

【6年生：修学旅行先の日光東照宮の歴史や見所について】

「日光東照宮」について、画像を駆使しながらクイズを交え、児童の関心を高める工夫が随所にちりばめられていた。

【情報リテラシーについて】

SNSの留意点や、確かな情報収集の仕方等、専門家による実感のこもった説明であったため、教師の説明よりも真剣に聞き入っていた。

(2) 新聞に投稿（記事の発信）

本校では、「全校俳句作り」に取り組んでいる。提出は子どもたちの自由意志である。提出された俳句は、校長が、すべて 学校だよりに掲載するとともに、上毛新聞「上毛ジュニア俳壇」(資料1)に投句している。(5, 869投句し、新聞に55句掲載された。)

2020年 (令和2年) 11月18日(水曜日) 文芸 (12)

上毛ジュニア俳壇

「選者・佐藤清美」

ふた葉の部

どんぐりがころがってるよほづりんぐ
前橋駒形小1年 ひきだりよう

【評】あちこちころがっているドングリが、ボーリングのピンのようにおもえました。だれがたまをなげたのでしょうか。

おかあさんまやいたらいにおい
前橋山王小1年 うめやまけいせい

【評】おかあさんがやいてくれているサンマ。いいにおいがしてきて、おいしそうです。秋のうれしいごちそうですね。

あめのなかいっぱいとれたよマスカット
館林八小1年 いづかすばる

【評】ぶどうがりなら、あめのなかでもがんなばれますね。おいしいマスカットがっぱいとれて、うれしかったです。

(資料1) 上毛新聞「上毛ジュニア俳壇」

(3) 新聞記事の活用

5年生の短学活で、新聞を活用して1分間スピーチを実施した。(写真6)年間を通して計画的に実践したため、次のように新聞を活用した効果が見受けられた。

- ・新聞を読むことで、世の中の情勢について興味をもって調べる児童が増えた。
- ・難しい語句等、調べながら読むことで、言葉を理解する力がついた。
- ・新聞だけでなくテレビのニュース等からも情報を得ようとする児童が増えた。
- ・記事の要約を行うことで、大事な情報を正確に抜き出す力がついた。
- ・新聞を身近に感じる児童が増えた。
- ・疑問や分からないことがあると、進んで調べる児童が増えた。



(写真6) 新聞を活用したスピーチ

5 実践の感想と今後の課題

NIEの可能性を切り開くため、「新聞」を広義に捉え、「投稿」と「出前授業」を重点的に2年間実践してきた。その結果として、様々な教育的効果が認められた。昨年と同様に、自分の書いた俳句が、新聞に掲載されることで、子どもたちの自信につながり、自己肯定感を高める結果となった。また、親子の会話のきっかけ作りにもなり、家族の絆を深める効果も高まった。

また、スピーチの実践で見られたように、学習効果を高める結果となった。

さらに、新聞記者の「出前授業」のおかげで、修学旅行や社会科見学が充実したのはもちろんのこと、見学や学習後のまとめも、大変充実したものとなり、教育的効果も認められた。

今後の課題は、修学旅行や社会科見学の事前学習として、新聞記者による「出前授業」を継続して実施することである。そのためには、年間指導計画に位置付け、確実に実施し、子どもたちの学習をより充実させる必要がある。

新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成

沼田市立薄根中学校

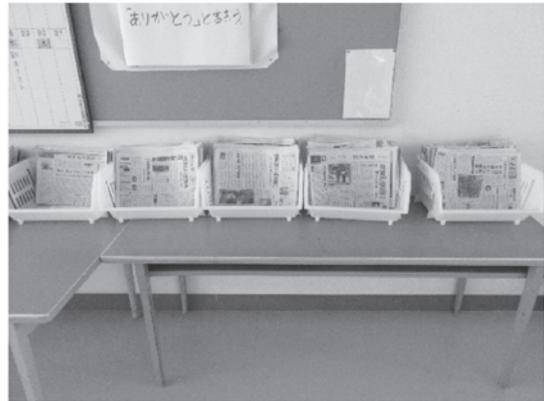
教諭

兵藤 泰明

1 実践の概要

本校は、NIE実践校として指定を受け、3年目の実践を行ってきた。

- (1) 国語科での実践
- (2) 学校だよりなどでの啓発活動
- (3) 上毛新聞ひろば欄への投稿
- (4) 委員会活動における新聞作り



2 新聞の置き場と整理の方法

配送された新聞を多目的室前の廊下に置く場所を作った。新聞の名前が見えるように立てて掲示する方法を行った。

読み終えた新聞の整理の方法としては、まとめてロッカーの中に保存した。そして、本校で行っているリサイクル活動で古新聞として処理した。

3 実践内容

(1) 国語科での実践

① 単元名

情報を読み解く 教材名「新聞記事を読み比べよう」

② 授業の視点

文章の内容を分析したり表現の仕方を批評したりする力を身に付けるために、新聞記事を利用したことは効果的であったか。



③ 育成を目指す言語能力

- 文章中における語句に注意して、書き手の立場や意図を読み取る能力。
- 複数の文章を読み比べるなどしてそれぞれの構成や展開の違いについて評価する能力。
- さまざまな文章に表れているものの見方や考え方に触れて、自身の意見や考えを形成していく能力。

④ 本時の学習

1) 目標 新聞記事を比較し各紙に特徴があることを知る。

2) 本時の評価項目

- < 満足 >新聞を比較し各紙に特徴があることが分かり、様々な内容があることを知る。
- < 十分満足 >提示された記事について考えを持ち意見交換することができる。

3) 展 開

過程 (時間)	主な学習活動	指導上の注意点および支援
つかむ 10分	<p>○本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>5紙のトップ記事を比較して各紙の特徴を考えよう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいを知る。各紙の特徴を考えながら、ワークシートに書いていくことを知る。 ・話題の提示を行うためにパワーポイントを使用し視覚的にとらえさせる。
追究する 30分	<p>○5紙の一面を比較し、気づいたことを書く。(12月7日) (12月15日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・4紙が1面に「はやぶさ2カプセル帰還」を取り上げている。地方紙のみ違う記事を取り上げている。 ・全紙が1面に「Go To」を取り上げている。
	<p>○12月9日はどうか？ 気づいたことを書き意見交換する。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・共通の記事が2紙のみで他は違うことに気がつく。 ・見出し、リード、本文と記事が構成されていることを知る。
	<p>○「鬼滅」に残酷シーン子どもに見せていい？の記事を読み意見を交換する。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味をもって取り組めるように、アニメの話題の新聞記事を取り上げる。 ・「鬼滅」に残酷シーン子どもに見せていい？という見出しについてどう思うか見出しの評価を行う。 ○この見出しで読みたいと思うか。 ○誤解を招く表現になっていないか？ ○表現は適切か？
まとめる 10分	<p>5 本時の活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習でわかったことや新聞に触れるときに生かしていけそうなことについて記述させる。 ・新聞には文化欄などの記事もあることを知る。 ・新聞記事には「鬼滅」関連の文化的な記事もあることを紹介する。

⑤ 成果と課題

○ 成果

- ・「はやぶさ2カプセル帰還」を5紙のうち4紙が取り上げているが、地方紙のみ違う記事を取り上げているのを見て、全国紙と地方紙の差異に気づくことができ、新聞を比較して読むよさに気づくことができた。
- ・日常生活の中で新聞を比較して読むことがないので、よい経験となった。
- ・新聞の文化欄には話題のアニメの記事なども取り上げられることを知り興味を持って読むことができた。

○ 課題

- ・アニメの記事に興味を持って話し合いに取り組めたのももう少し時間をとって良かったのではないかな。

(2) 学校だより「いなりだい」での啓発活動 上毛新聞出前講座

薄根中学校は、日本新聞協会のNIE実践指定校に認定されて3年目です。

NIE (Newspaper in Education = 「エヌ・アイ・イー」と読みます) は、学校などで新聞を教材として活用することで、世界80か国以上で実施されています。NIEの実践によって、生徒の読解力向上

に新聞は有効であることや新聞に親しみながら家族との対話を深め、コミュニケーション力を身に付けることができることが明らかになっています。上毛新聞の「みんなのひろば U22私の声」には、度々、薄根中の生徒が投稿した文章が掲載されていることをご存知の方が多いかと思います。



上毛新聞に掲載された記事

日々情報触れ
リテラシーを
薄根中

新聞を
読もう
News Education

沼田 新聞を教育に活用する「NIE」の普及を進める上毛新聞社の出前講座が27日、本年度の日本新聞協会のNIE実践指定校に認定されている沼田市の沼田薄根中で行われた。3年生52人が身近なメディアについて理解を深めたII写真。

編集局NIE・NIB担当の子安信記者が講師を務めた。子安記者は新聞の歴史やメディアそれぞれの特徴などを紹介。メディアリテラシーについて「情報を取捨選択するために、日ご

ろから情報によく触れてほしい」と呼び掛けた。村松和泉さんは「情報を提供する側の人の意見が聞けて新鮮だった」と話した。

上毛新聞社は、出前講座を希望する学校・企業・団体を受け付けています。問い合わせはNIE・NIB推進事務局(☎027・2554・6000)へ。

また、薄根中には毎日、7社の新聞紙が届けられ、生徒がいつでも読めるようになっています。

この教育活動をさらに進めるため、11月27日(金)に上毛新聞社編集局から講師を招き、「上毛新聞社出前講座」を行いました。新聞の歴史やテレビや

インターネットなどのメディアの特徴など、情報を適切に判断したり、利用したりすることについて学習する機会となりました。このことは、翌日28日(土)の上毛新聞にも掲載されました。

(3) 上毛新聞ひろば欄への投稿

生徒が新聞に関心をもつよう、今年度も日々の活動の中で書いた作文や国語の授業で書いた文章

の投稿を行った。

生徒には、行事や授業に取り組む前に、予め目標をもたせて取り組ませている。その目標がどのくらい達成できたのかどうか、また、達成できなかったならば、どこに課題があるのかを自覚させるために、他の生徒の作文を紹介し、自分の達成度の参考にさせる。生徒の作文だけでなく、上毛新聞の「みんなのひろば」に掲載された投稿作文も積極的に学年通信に掲載している。新聞を購読していない家庭も多いので、掲載された作文を学年通信にも掲載している。生徒の多くは新聞に掲載されたことを嬉しく感じている。そのため新聞への掲載を意識して、誤字・脱字が目に見えて減ったり、読み手を意識した工夫を凝らした文章を書いたりする生徒も多くなってきた。

(4) 委員会活動における新聞作り

生徒会本部や図書委員会、環境委員会が新聞作りを行い発行している。学校文集に寄せた環境委員長の文章によれば「環境新聞の取り組みを始めました。読んでくれたという話を聞き、うれしさと同時に感謝の気持ちでいっぱいになりました。」とある。

4 感想と今後の課題

<成果>

- ・生徒の意見により、生徒が新聞に触れる機会を意図的に設定したことにより、複数の新聞を比較した会話が見られるようになった。
- ・生徒の原稿を学年職員が投稿するようになり、ひろば欄に掲載される機会が飛躍的に増えた。
- ・保護者や地区の方より掲載されたことを喜ぶ声が出せられた。
- ・昼休みに廊下で新聞を広げている生徒が見られた。
- ・図書委員会の活動に、新聞の扱いを位置づけたことにより、図書委員長が新聞を読むように呼びかけている場面が見られた。
- ・委員会活動や学級活動などでまとめの学習で新聞作りを行うようになった。
- ・委員会の活動などで生徒が主体的に新聞作りの活動を行うようになった。

<課題>

- ・全校で新聞を活用した取り組みを考えられると良いと思った。
- ・新聞を教室に持って行って読んでしまうと、次に読もうとした生徒がなくて、読めないということが生じていた。多数の生徒がいかに効率的に読めるようになるか、考えていきたいと思った。

U22 生の声

家での面接練習も役に立った

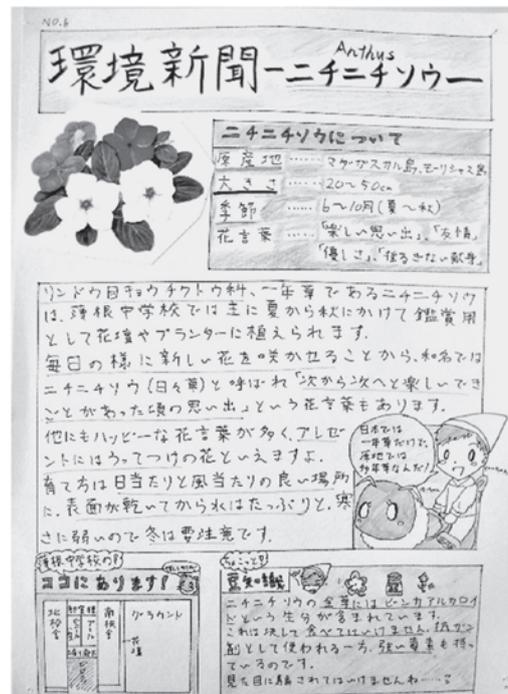
公立高校の前期試験が近づいてきています。面接練習も役に立っています。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。

友達や後輩から力をもらった

公立高校の前期試験の面接練習は、友達や後輩から力をもらいました。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。

無事に終わって一安心

公立高校の前期試験の面接練習は、無事に終わって一安心です。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。面接練習は、面接の練習を取り組んでみました。



ものの見方や考え方を広げる機会に出会うために（継続2期目）

－新聞に親しみ、活用する実践－

高崎市立第一中学校 報告者 関口めぐみ

1. はじめに 実践の概要

1～3学年が各3クラス、特別支援学級が2クラス、計11クラス、生徒数259名、職員数41名の本校は、中核市高崎市のほぼ中心に位置し、歴史を紐解けばこの地での開校（県立中学校）は、1898年に遡る。新制中学校となってからは69年、市内では「伝統ある学校」として周知されている。また、長年熱心な図書館指導員のもと、「学習・情報センター」機能としての図書館教育と読書推進の充実が伝統的継続的に育まれてきている土壌がある。一方、例に漏れず新聞を購読している家庭の減少には歯止めがかからず、生徒の過半数は世の中の情勢を知り得る方法をネットに依存しており、上質の文章から得られる想像力や情報の正誤への判断力の低下が心配される実情が厳然としてある。

さて、本校の今年度の校内研修のテーマは「学びに向かう力」を育てる指導の在り方である。昨年度は2年ぶりにNIE実践の指定を受け、新聞の活用を推進する機会に恵まれた。生徒が自らの興味関心に対しての疑問解決の手立てとして、新聞の存在を意識する環境づくりにつなげてきた。今年度はさらに新聞が活用できるように、NIEコーナーを充実させ、各教科や委員会に声をかけ、生徒の学びに向かう力が深まるように活動した。

2. 実践の実際

（1）購読計画と整理方法

i. 購読計画

7月1日～11月30日 読賣新聞・上毛新聞

10月1日～1月31日 日本経済新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞

12月1日～3月31日 東京新聞

2021年が東京オリンピック開催年であることから、東京新聞の購読月を定めた。

ii. 置き場所と整理方法

①配達場所		職員玄関前のポスト下に、NIE専用かごを設置。北側で風が吹き込むため、かごの下に重りを取り付けた。
②当日の新聞(最新版)		3階（2学年教室の階）図書館前の廊下に長机を設置し、新聞を平置きした。 いずれも新聞クリップを使用し、通りかかった生徒や教員が随時新聞を手にとって広げられるようにしておいた。
③一昨日以前の新聞		3階学習室に今年度は新聞を整理する棚を入れ、NIEの新聞が見やすく、生徒が調べやすいように工夫した。学習室の棚に銘柄毎に3か月間保管した。
④③より以前の新聞		空き教室のロッカーに銘柄ごとに保管した。

☆今年度はコロナウィルス対策として、入口に手の消毒液を置いた。

当日の新聞のコーナー



新聞調べコーナー

(3か月分保管)



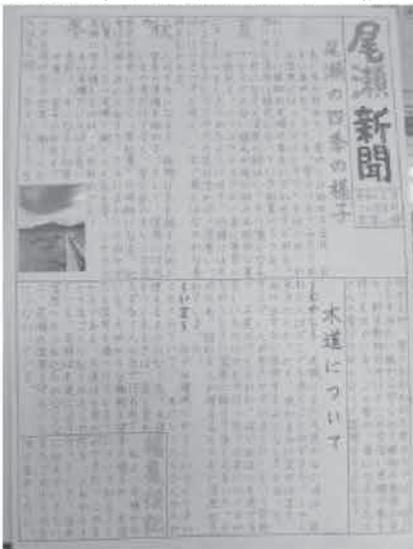
(2) 給食時の放送

給食の時間に放送委員が全校放送で新聞記事を紹介し、感想を述べている。採用した記事は、職員室前の廊下に掲示される。



(3) 行事の振り返り

国語や総合的な学習の時間に、新聞の書き方、レイアウト、見出しの付け方等について学習してから、1年生は「職業調べ」と「尾瀬学習」、2学年は「上毛かるたの旅」のまとめを、個人個人がB4版の新聞にまとめ、廊下に掲示した。



(4) 国語科における実践

① 1・3学年：名文に触れ、語彙を増やす

授業の始まりの5分間、「天声人語書き写しノート」に取り組む。天声人語の切り抜きは、教師が事前に数日分渡しておく。書き写しの目的を年度初めに知らせ、筆記用具は鉛筆を使用し、辞書の使用を奨励する。

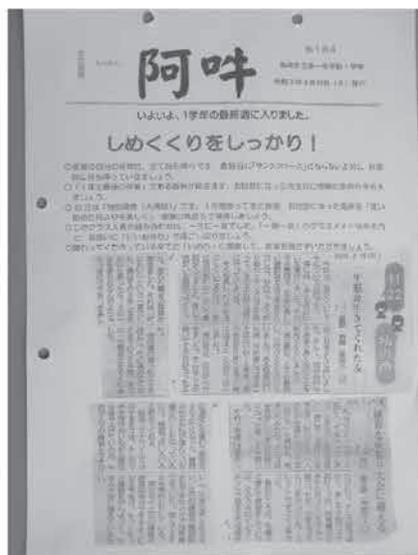
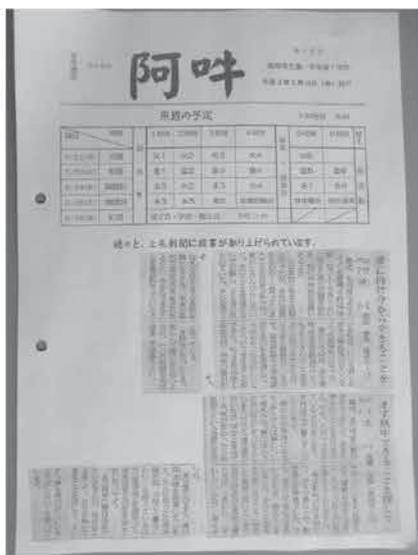
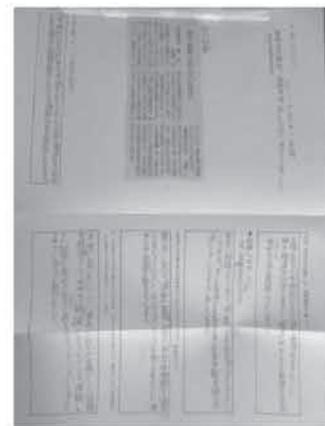
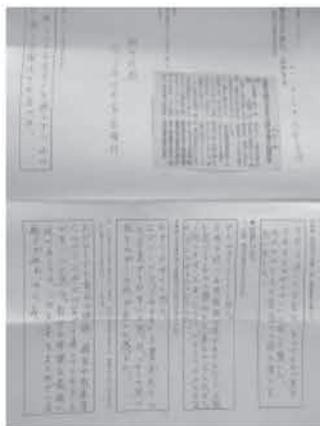


② 1 学年：投書を批評する(2 学期)

新聞の中の投書を切り抜き、事実と意見に線を引かせて分析させ、感想を書かせた。

③ 1 学年：新聞の投書記事を書く(3 学期)

身近な話題を探し、自分の考えを130字程度で書き、推敲し、上毛新聞の「U22 私の声」に投書した。掲載された記事は授業、クラス、学年で紹介するとともに、教室に掲示したり、学年便りに掲載した。



(5) 社会科における実践

3 学年公民分野の「マスメディアと世論」の授業において、朝日新聞と読売新聞の社説を読み、感じたことを書く授業を行った。マスメディアから発信される様々な角度からの切り口を読み取る活動に取り組みさせた。

(6) 家庭科における実践

「家族・家庭生活」における高齢者理解についての3年生の授業で、新聞を活用した授業を実施した。加齢における身体的変化について学習した後、高齢者の社会的役割や高齢者の就労・社会参加について考える際の一資料として提示し、考えをまとめた。

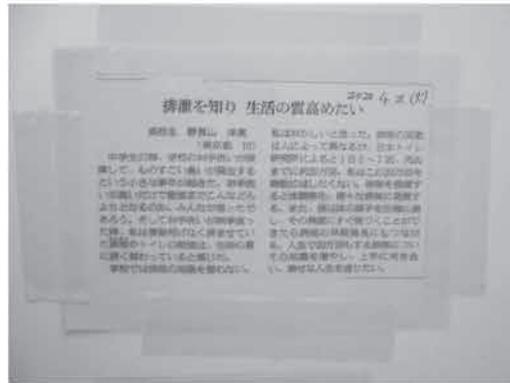
(7) 図書委員会における実践

2 学期に図書委員がクラスごとにテーマを決めて関連記事を切り抜き、模造紙にまとめて掲示する活動を実施した。数社の新聞記事を比較することで、情報の伝える内容や取り扱いの大きさの違いなどに気づき、考え方を広げる事ができた。



(8) その他

図書館の常設掲示板に、新聞記事を使った図書のご案内を掲示したり、トイレに排泄と環境の大切さを訴える投書の掲示をしたりと、生徒の生活に身近な情報発信として新聞を活用した。



3. 実践の感想と今後の課題

情報センターである図書館入り口前の廊下の机に新聞を平置きに展示したことや、今年度は新たに学習室に3か月分の閲覧できる棚や新聞を読む場所を作ったことで、新聞を授業で活用しやすくなった。休み時間や朝、放課後等に生徒や教員が新聞を手にする姿も見られ、新聞そのものを身近に感じる生徒が増えてきていると思われる。ただ、コロナウィルス対策のために、学年ごとに曜日を決めて図書館を利用をするように今年度は変更したので、図書館を利用する機会が全体的に減少したのが残念である。

冒頭で述べたように、日常的に新聞を読む習慣がない生徒が増えている昨今だが、それだけに、授業の中で新聞を扱う場面は、かえって生徒達にとって新鮮さがあり、学習意欲が引き出された。

来年度からGIGAスクール構想が始まる。2年間で行ってきた新聞の活用の実践を大切にして、今後も出来る範囲で新聞の活用とインターネットの調べ学習を通して、学びを広げ考えを深めていく生徒の育成に努めていきたい。

新聞を活用し、世の中をより広い視野で見ることのできる生徒の育成 ～生徒主体のNIE普及活動を中心に～

嬭恋村立嬭恋中学校

1 実践の概要

本校では「自律・自立」をスローガンに、生きる力を育む学校を目指している。昨年度までの2年間は、教師が授業で新聞を活用する実践を中心に行ってきた。そして3年目となる本年度は、生徒にとって「自律・自立」の活動ができるよう、教師からだけではなく、生徒自身もNIEの普及に関わりながら新聞に親しむ機会を増やせる実践を行いたいと考えた。具体的には代表生徒12名で構成するNIE推進委員会を組織し、全校生徒の意識調査や新聞に親しみやすい教室の環境づくりなどの活動を行った。

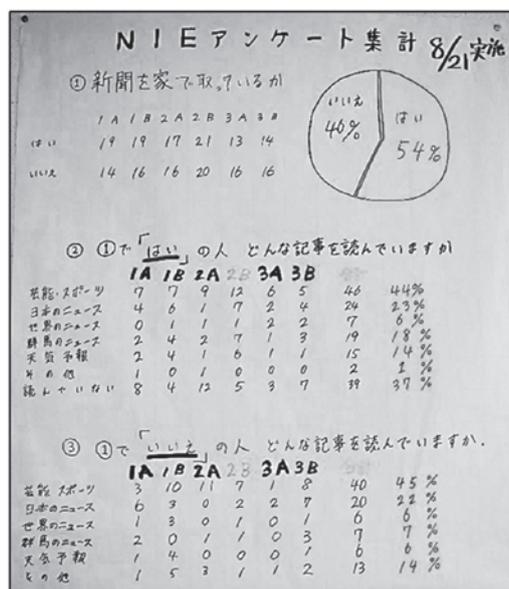
2 実践の内容

○ NIE推進委員会

7月より各クラスから2名ずつ推進委員を募り、12名でNIE推進委員会を組織した。NIE推進委員会は「嬭恋中学校の全校生徒が新聞に親しみやすい環境を整えて提供しながら、全校にNIEが普及するようにする」という目標を掲げ、全16回の定例会と常時活動を行ってきた。NIE推進委員会の活動は以下の通りである。

① 第1回NIEアンケートの実施・集計・掲示

NIE推進委員会として活動する際、全校生徒の新聞への関心や使用頻度などに関する現状を知るために、8月に生徒を対象にしたアンケートを実施した。アンケートの内容は委員長を中心にして生徒たち自身で話し合い、決定した。生徒191名に実施した結果、以下の通りとなった。



①新聞を家で取っているか

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
はい	38	38	27	103
いいえ	30	26	32	88

② ①で「はい」の人 どの記事を読んでいますか。(複数可)

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
芸能スポーツ	14	21	11	46
日本のニュース	10	8	6	24
世界のニュース	1	2	4	7
群馬のニュース	6	9	4	19
天気予報	6	7	2	15
その他	1	1	0	2
読んでいない	12	17	10	39

③ ①いいえの人 どんな記事を読みたいか。(複数可)

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
芸能スポーツ	13	18	9	40
日本のニュース	9	2	9	20
世界のニュース	4	1	1	6
群馬のニュース	2	2	3	7
天気予報	5	0	1	6
その他	6	4	3	13

④ 「読んでいない」人 なぜ読んでいないのか。

スマホやテレビで知れるから	7人
興味がないから	7人
読みたいと思わないから	6人
時間がないから	3人
字を読むのが大変だから	3人
面倒くさいから	3人
読む理由がないから、 長くて飽きる、	
YouTube で知れるから	各1人

⑤ 普段情報を得ているメディア(複数可)

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
新聞	17	20	10	47
テレビ	63	60	45	168
ラジオ	5	2	3	10
スマホ	34	51	24	109
パソコン	14	12	11	37
その他	5	1	0	6

アンケートの結果、家庭で新聞を取っていない生徒と取っていても読んでいない生徒を合わせると、半数以上の生徒が家庭で新聞に触れる機会がほとんどないことがわかった。また、情報を得るのに新聞よりもテレビやスマートフォンを活用している生徒が多いことや、芸能スポーツ記事に関心の高い生徒が多い傾向もうかがえた。NIE 推進委員が作成した集計結果は談話ホールに掲示した。

② 常時活動

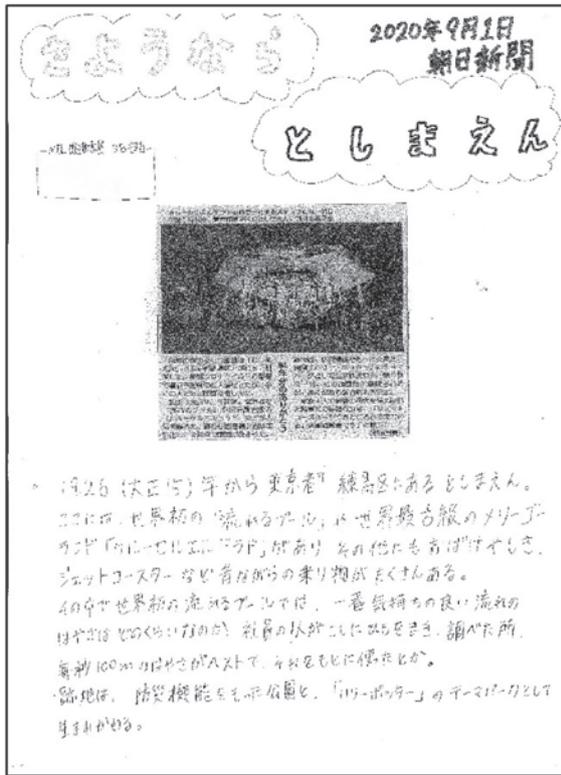
9月から12月の期間をNIE購読期間とし、新聞が配達された。本年度は上毛、朝日、読売、産経、日経、東京新聞に英字新聞の毎日ウィークリーを加えた7紙を購読した。NIE推進委員会の管理のもと、例年通り談話ホールのNIEコーナーへ新聞をおいて生徒が自由に読めるようにした。さらに、今年度は各クラスにも1部ずつ新聞を置いた。各クラスのNIE推進委員が毎日取り替え、教室でも生徒が新聞を読める環境を整えることができた。



また、NIE推進委員会の話し合いの中で、全校生徒によりたくさん新聞を読んでもらうために、気になった記事や読んで欲しい記事のスクラップを定期的作成し、クラスに掲示しようという案が出され、活動として採用された。NIE推進委員会の生徒たちは、記事に関する感想や紹介を加えながら、購読期間中に掲施用スクラップを作成した。作成時、同じような記事のスクラップばかりに偏りがちな生徒に対して、教師はアンケートの結果を振り返らせたり、違う話題の記事



のスクラップも作ってみよう助言したりした。NIE 推進委員会の生徒から、「毎回スクラップを楽しみにしてくれている子がいる」「読んでもらうためにこんな工夫をしてみた」などの意見も聞こえた。



③第2回 NIE アンケートの実施・集計・掲示

2学期の活動を終わってから、3学期の初めに第2回 NIE アンケートを行った。生徒 186 名に実施し、結果は以下の通りとなった。

①教室の新聞を読んだか

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
はい	52	40	45	137
いいえ	13	23	13	49

② ①で「はい」の人 どんな記事を読んでいるか。（複数可）

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
芸能スポーツ	20	21	22	63
日本のニュース	25	23	24	72
世界のニュース	15	10	16	41
群馬のニュース	6	6	2	14
天気予報	12	5	0	17
その他	9	6	2	17

③ ①いいえの人 なぜ読まなかったのか

興味がない	11人
時間がない	6人
読もうと思わない	2人
あると知らなかった	2人
家で読んでいる	2人
遊んでいたい、気にしていない、必要ない、他のメディアですむ、嫌い	各1人

④ 新聞に触れる機会が増えたか。

	1年合計	2年合計	3年合計	全校
はい	34	22	29	85
いいえ	31	41	29	101

※④は、授業等で新聞に「触れる機会」も含む。

教室の新聞や掲示したスクラップに目を通していた生徒が数多くいることがわかった。また、第1回のアンケートと比較すると、教室に新聞をおいたりスクラップ記事を掲示したりすることで、「日本のニュース」や「世界のニュース」を読む生徒の数が飛躍的に増えたことがわかった。NIE推進委員会の活動によって、新聞記事が目に入りやすい環境を各教室に提供することができたと考えられる。

しかしながら、「教室の新聞を読んだか」に対して「はい」の割合は過半数であったものの、「④新聞に触れる機会が増えたか」に対しての「はい」の割合は半数以下だった。新聞が目に入り読んだとしても、新聞に触れる機会が増えたという実感をもたない生徒も数多くいたことがわかった。

また、「新聞のよさとは何か」という質問に対し、右のような回答が得られた。「読み返せる」「好きなときに読める」「保存可能」といった新聞のアーカイブ的な役割を「よさ」と感じる生徒が多くいた。さらに、「情報を集められる」「ニュースの大きさがぱっと見でわかる」「知識が増える」「興味がないことも載っているのでもいい、興味の範囲を広げられる」といった意見は、新聞を通して知識や識見、関心を広げられる「よさ」についての意見である。先にも述べたとおり「世界のニュース」や「日本のニュース」を読む生徒の数は増えており、今年度の実践テーマ「世の中をより広い視野で見る」きっかけづくりをすることができたといえよう。

読み返せる	12人
細かい情報が分かる	10人
好きなときに読める	8人
保存可能	8人
気になった記事をすぐに読める	6人
読む力が伸びた	6人
情報源として信用できる	6人
知識が増える	6人
情報を集められる	5人
ニュースの大きさがぱっと見で分かる	5人
目に優しい	4人
興味がないことも載っているのいい、興味の範囲を広げられる。	4人

3 実践の感想と今後の課題

NIE推進委員会の組織やその活動を行うことで、2学期を中心に生徒が新聞に親しみやすい環境づくりを、生徒の力で進めることができた。NIE推進委員会の生徒は、「教室の後ろで話し合うクラスメイトがいてうれしかった」「自分の作ったスクラップ記事を読んでいる友達がいて、推進委員の目的をだいたい達成できていた」などの意見を反省で挙げており、本校の掲げる「自律・自立」のローガンのもとに活動に取り組んだ達成感を得られていた。実際に、教室では推進委員の生徒が作ったスクラップを他の生徒がよく読んでいる様子も見られた。

一方で、「親しみやすくすることはできたと思うが、浸透はしていない」「いつも見ているのは同じ人だった」という反省も挙がった。2回のアンケート結果からもわかるように、NIE推進委員会が掲げた目的のうち「新聞に親しみやすい環境づくり」は達成することができたが、「全校へのNIE普及」の達成には課題が残った。朝の時間や帰りの短学活を利用して新聞を読む時間をつくるなど、学校全体として新聞に触れる活動を行うのもひとつの手立てだろう。

今後もNIEをきっかけに生徒が新聞に関心をもち、得られた情報から広い視野で世の中について考えられる力をつけられるような実践を行っていきたい。

新聞を用いて実社会とのつながりを考える教科指導の取り組み

ぐんま国際アカデミー中高等部 教諭 坂本 樹 今井 信一
木佐貫美帆 吉田 峻 坂本 秀明

1. 実践の概要

1. 1. 本校の教育の特徴

ぐんま国際アカデミーは小中高一貫のイメージ教育を行っており、学年やコースにもよるが、半分以上の教科の授業で英語を教授言語としている。また、2012年より高等部の一部で国際バカロレアディプロマプログラム(DP)を提供している。また2019年度からすべての中等部生に対して国際バカロレアミドルイヤーズプログラム(MYP)の候補校として学習指導を行っている。

1. 2. 取り組みのねらいとその理由

本校が実施する国際バカロレアプログラム(IBプログラム)では、指導方法の1つとして「ローカルな文脈とグローバルな文脈を反映した指導」を重視している。IBプログラムの理念が紹介されている『国際バカロレア(IB)の教育とは』(2019)ではこの指導方法を、「実際の文脈と例を用いて指導し、新しい情報を自分の体験や周囲の世界に結びつけて消化することを児童生徒に奨励」することと説明している(p. 7)。つまり、IBプログラムでは、生徒が各教科における学習内容と、現実の社会との結びつきを考えられるような指導が目指されている。

これらのことから、本校では様々な教科における学習内容と、現実の社会とを結びつけるための教材として、新聞を用いることとした。新聞に掲載される社会の様々な出来事を、各教科における「見方・考え方」でとらえていくことが、本校における取り組みのねらいである。

1. 3. 実践の方針

上記の課題をふまえ、本校では複数の教科で新聞を活用した授業を展開した。今年度は、国語科(中学2・3年生)、社会科(中学1・3年生、高校1年生)、体育科(高校2年生)の授業で、新聞を活用した。加えて、他教科や他学年にも広げるために、新聞を図書館に置き、生徒の目に触れるよう工夫する。

(文責：坂本樹)

2. 授業における取り組み

2. 1. 中学1年生(MYP社会科)の取り組み

中学校1年生では学習指導要領歴史的分野「2A 歴史との対話」の単元で新聞を用いた授業を行った。時代区分の意味や意義について扱う際に、平成の31年間を振り返り、平成を2つに分ける授業を構想した。

本授業では読売新聞の「読者が選んだ10大ニュース」を30年分用意し、配布した。生徒は30年分の紙面から、平成を2つに分ける大きな出来事を紙面から読み取り、その出来事の前後で社会の仕組み・制度や、私たちの生活・考え方がどのように変化したかを考察した。

歴史を区分する単元の形成的評価として行ったが、平成の30年間は生徒の知っている出来事も多く、また資料を持ち帰って保護者にインタビューを行う生徒もいた。

このように、新聞は現代史を学習するうえでは重要な教材であり、生徒は意義深い学習をすることができた。



(文責：今井)

2. 2. 高校1年生(公民科現代社会)の取り組み

公民科では例年積極的に新聞を取り入れた学習を続けてきた。本年度は長期政権となった安倍首相の退任を各紙がどのように報じているかに着目し、政治とメディアの関係を、メディア同士の比較を通じて考察する授業を行った。

授業では例年事前予約を行い、教材価格で新聞をまとめて購入することが多いが、今回のニュースは予測が出来ないタイミングでの

物であったため、事前予約ができず、定価で購入せざるを得なかった。それもあって、授業ではコピーでの対応となった点が残念である。ぜひNIE推進のためにも、各新聞社に柔軟な対応をお願いしたいところである。

授業では太田市で入手できる読売・朝日・毎日・日経・産経・東京・上毛の7紙の1面・政治面・社会面と社説を提示した。それらを基に各紙が安倍政権のこれまでの取り組みをどのように報じているか、評価しているかを、他紙と比較しながら考察した。また、その後各自が安倍政権をどのように評価するか、評定と根拠を考えた。

新聞は各社で主義や主張があるにもかかわらず、中高生のほとんどは新聞に書かれていることが絶対的に正しいことであると思いがちである。新聞の報道は社会を一側面から見たものであると体感的に理解するためにも、複数紙を比較することは意義深いものであると考えられる。その中で多様な意見や価値観を理解し、自らの考えや価値観を構築したり、見直していくような授業が必要だろう。

なお、この授業は朝日新聞・読売新聞・東京新聞・上毛新聞の各紙で取り上げていただいた。その際、各新聞社の記者とお話をさせていただき機会を得たが、読み手と書き手の間に入る、NIEを推進する教員のひとりとして、書く側の方と交流を持つことも非常に意義深いと感じた。

(文責：今井)

2. 3. 中学校2年生 (MYP 国語科) での取り組み

中学校2年生の国語科の授業では、メディアの特徴を理解すると共に、「目的に応じて情報は編集された状態でやりとりされる」というテーマのもと、新聞記事の中で使用されている表現と編集者の編集意図を結び付けて考えることを最終的な目標として、二つの新聞記事の比較分析を行った。

上記の目標を達成するために生徒は以下のことを行った。

まず、コロナ禍において世間で大きな注目を浴びていたフェイクニュースがどのようにして生まれ、広がっていくのかということを導入として用い、私たちの身の回りにはどのようなメディアがあり、そこでどのように情報がやりとりされているのかということを考えて。生徒によっては日常生活の中で触れるメディアの種類に大きな偏りがみられたため、新聞を含むそれぞれのメディアの特性についてより理解を深めるために、池上彰「メディアと上手に付き合うために」の読解やNHK高

校講座国語表現のメディア・リテラシーに関連する動画の視聴もあわせて行った。

その上で、光村図書出版「国語2」に掲載されているフィギュアスケーター羽生結弦の優勝を伝える二つの新聞記事を分析した。分析の際には、「見出し」「リード文」「本文」「写真」という観点を教員の方から生徒に示し、それらの専門用語も使いながら説明をするよう指示をした。生徒たちは、それぞれが分析したことについて4人から5人の小グループの中でディスカッションすることを通して、同じ出来事について取り上げた記事でも編集者が異なることによって読者の受け取る印象が異なること、またその印象の違いが新聞記事の中で用いられている具体的にどの表現からもたらされているものなのかということを理解していった。

その後、教科書からは離れ、渋谷日向子選手の活躍を伝える実際の新聞記事を比較分析させた上で、本単元の最終課題として中間テストでは、藤井聡太棋士の活躍を伝える初見の新聞記事を比較分析する小論文を書かせた。

本学習を通して、生徒たちは今まで深く考えずになんとなく受け取っていた情報の細部の表現にも着目しながら批判的に読むことと、メディアの特性を十分に理解した上でそれらを活用していく重要性について理解を深めることが出来た。主に学校教育の中でのみ使う教科書ではなく、新聞という実社会の中で多くの人々に活用されているものを教材として取り上げられたことは、IBの目指す生涯学習者を育てるという観点から大変有益であったように感じている。今回は教員の方で分析対象となる記事を指定した上で比較分析をさせたが、今後は興味・関心に応じて生徒自身が分析対象の記事を選択し、比較分析するという課題にも挑戦していきたい。その際には、図書館で保管している複数社の新聞記事や、新聞記事の検索データベースを活用していきたい。

(文責：木佐貴)

2. 4. 中学校3年生 (MYP 社会科) での取り組み

中学校3年生の社会科公民的分野では、昨年度に実施した「現代社会と私たちの生活」の単元に加えて、「私たちの暮らしと経済」の単元で新聞を用いた授業を行った。この単元では、「個人や企業は、グローバルな相互作用のなかで自身にとって最適な行動を選択する」というテーマを設定して生産と消費、企業、株、為替、貿易、経済指標などの経済分野全般について学習した。また、単元の最後

には、2020年7月27日から2020年8月21日までのうちから、任意の一日の日経平均株価を例に用いて、日経平均株価の動向分析に強弱材料を用いることの有用性を論じさせるという課題を出した。

2020年の年間GDP成長率を予測させる学習をする際にも新聞を活用した。この学習では、2020年1月から12月までの新聞記事を参照できるウェブサイトを利用した。グループワークを通じて生徒たちはGDPに影響しそうなニュースをピックアップし、そのニュースによってGDPにどのように影響したと考えられるのかを分析した。その後、グループが挙げたニュースとその影響をもとに昨年に比べてGDPがどの程度成長したのかを予測した。

過去の新聞記事を簡単に検索できるシステムは、今回のような過去のデータを参照する必要がある分析をする際にとっても便利であることがわかった。今後は、地理的分野や歴史的分野でも活用したい。

(文責：吉田)

2. 5. 中学3年生(MYP国語科)での取り組み

中学3年国語科では、新聞の社説を分析することを通して、筆者の目的やものの見方をとらえることを目指した。そのために、期末試験において新聞の社説を比較分析するという課題を設定し、その課題に向けて夏休み期間も利用しながら、様々な教材を用いて学習を進めた。

上記のねらいを達成するため、新聞記事を活用した場面は大きく3つある。第1に、授業内で社説の比較分析の練習を行った場面である。ここでは教科書に掲載されている和食文化に関する社説を2つ扱い、比較分析を行うための観点を指導した。例えば、見出しを見たときに和食の中でもどのようなトピックを取り上げているか確認したり、文章の中でどの部分に主張がまとめられているか、構成を確認したりした。さらに、語句の選び方や、表記の仕方から、読者の受ける印象や理解する意味が違うことについても、この教材で取り上げた。

新聞記事を用いた2つめの場面は、夏休み中の学習期間である。夏休みの課題として、複数の社説の比較分析に取り組ませた。分析で扱ったのは、新型コロナウイルスによって生じた差別や偏見、嫌がらせについて取り上げた社説と、テレワークの推進を取り上げた社説である。それぞれ、授業内で取り扱った比較分析の観点を応用して、リアルタイムに読まれている記事进行分析する機会とした。

最後に、単元のまとめとなる期末試験の中で新聞記事を取り上げた。これまでの学習内容と、分析の練習をふまえて、初見かつ現実社会と関連した文章を読むことをねらいとした。

これらの活動を通して、生徒は文章を比較したり分析したりするとはどういうことかを学んでいった。つまり、文章を読むときに、観点をしっかりと決めて、その観点から考えられることや、考えの根拠となる部分をとらえることを意識できるようになった。新聞記事は単なる読解練習の道具ではなく、現実社会と関わる真正の(オーセンティックな)教材であるため、生徒が文章を読むための動機付けに役立てられる可能性がある。今後は、本校が取り入れている電子版の新聞記事検索システム等も利用しながら、生徒自身が読む材料を探すような取り組みにも挑戦していきたい。

(文責：坂本樹)

2. 6. 高校2年生(体育科)での取り組み

高校2年生の保健の授業において新聞を用いた授業を行った。授業の内容と社会のつながり理解するために新聞を通して学びを深めた。

生徒たちは1人1単元のプレゼンテーションを作り、その際に新聞記事を用いて説明をするよう指導を行った。実際に単元に沿った内容の新聞記事を調べてみると、教科書には載っていない様々な社会の取り組みであったり、画期的な方法で社会問題の解決に取り組んでいる人たちの記事に出会うことができた。また、どれも非常に保健の授業と深く密接につながっていたので、生徒たちも興味を持って新聞を調べていた。

新聞を使った保健の学習によって、生徒たちが主体的に授業に取り組む姿が見られた。また、教科書の内容をより身近に感じることが出来る為、今後も保健の授業においての新聞記事の活用は非常に有用であるといえる。

(文責：坂本秀明)

3. 考察と課題

今年度、本校では様々な教科における学習内容と、現実の社会とを結びつけるための教材として新聞を用い、新聞に掲載される社会の様々な出来事を、各教科における「見方・考え方」でとらえていくことを研究課題とした。

本校で得られた成果として、生徒が様々な教科の「見方・考え方」にそくして、新聞記事を読むことが出来た点をあげることができ

る。例えば、中学3年生は今年度、社会科と国語科で新聞を用いた学習に取り組んだ。同じ新聞という教材を扱っていても、社会科では経済的な側面から新聞記事に書かれている事象を調査・分析している。一方で、国語科では新聞記事の「見出し」、「主張の見られる部分」、「語句の選び方」、「表記の仕方」等といった、新聞記事の書かれ方に焦点を当てた分析を行っている。このように、生徒が新聞記事を読むにしても、各教科が中心に扱う観点にしたがって様々な読み方を試すことが出来た点は、複数の教科で新聞を用いた教育活動に取り組んだ成果と言える。

一方で、本校での取り組みには課題もある。それは、新聞を教材とする授業を設計する際に、他教科との連携をより密にとることである。今年度、本校ではたしかに教科の枠組みを超えて新聞記事を用いた実践を行うという方針は立てられていた。しかし、各教科において「どのような新聞記事を扱うか」、「年間指導計画の中のどのタイミングで、新聞記事を扱うか」といったことについては、十分に議論を深められていなかった。扱う新聞記事と指導計画をより詳細に共有し、扱う新聞記事やタイミングを複数の教科で合わせる事が出来れば、生徒はさらに教科における「見方・考え方」を意識しながら、現実社会で起きる事象をとらえられる可能性がある。

平成29・30年度に改訂された新学習指導要領では、教育課程の編成にあたって「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」の必要性が明記されている（文部科学省，2017，p. 42、文部科学省，2018，p. 46）。ここで示されているように、教科横断的な視点で教育課程を編成していく際、「教育の目的や目標の実現」に資する形で取り組む必要がある。本校が今年度取り組んだ実践上の課題は、そうした「目的」や「目標」を教科間で共有することが十分にできず、手段であるはずの「教科横断的な」学習に焦点が当たった点である。この点については、来年度以降の課題としたい。

来年度以降に上記の課題を踏まえた実践を行ううえでも、今年度の取り組みには一定の価値がある。なぜなら、今年度の取り組みを通して、各教科の教員が、他教科においてどのような目的や目標、関心をもとに新聞記事を教材としているのか、認識をある程度共有できたからである。来年度以降は、そうした体験的に得られた知見を視覚化・言語化することで、文部科学省が期待している「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教

科等横断的な視点で組み立てていくこと」につながるだろう。

（文責：坂本樹）

引用・参考文献一覧

- 国際バカロレア機構（2019）. 国際バカロレア（IB）の教育とは. International Baccalaureate Organization.
文部科学省（2017）. 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編. 東山書房.
文部科学省（2018）. 中学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編. 東洋館出版社.

NIE 令和2年度の取組

群馬県立伊勢崎高等学校

教諭

森 貴由紀

I. 本校の実践概要

伊勢崎高校ではNIE実践校の指定を受けて3年目を迎える。今年度も引き続き学校司書を中心に生徒が興味を引きそうな記事を切り抜き、模造紙に貼り掲示している。新聞の置き場所については、新型コロナウイルスの感染防止対策として生徒が自由に手に取れるラックは廃止した。その代わりに教員が授業に活用しやすいように新聞社ごとに段ボールまとめて保管した。進路指導の一環として、面接や論文の指導を行う担当者にも新聞の活用法を伝えたため、入試を控えた生徒が過去の記事を探す姿が多く見られた。

前回は各社の社説を利用した国語科の内容を報告したが、今年度は公民科で行われた金融教育で新聞を活用した事例を取り上げる。

II. 授業実践の概要

(1) 単元(題材)の指導計画(全3時間)

時間	授業日時	学習活動の概要	使用教材
1	1月28日(木) 6校時 14:30~15:20 大会議室	(内容)家計のはたらき (概要)コロナ禍における家計の変化とそれが産業に与えた影響の考察を通して、家計の役割を理解する。	・『お金のキホン BOOK』 ・授業プリント ・新聞記事
2	2月4日(木) 6校時 14:30~15:20 大会議室	(内容)金融のはたらき (概要)コロナ禍における株価上昇の原因・背景の考察を通して、金融のしくみを理解する。	・『お金のキホン BOOK』 ・『生活が豊かになるお金の運用』 ・授業プリント
3	2月5日(金) 6校時 14:30~15:20 大会議室	(内容)中央銀行のはたらき (概要)コロナ禍における金融緩和政策の意義の考察を通して、中央銀行の役割を理解する。	・『お金のキホン BOOK』 ・『知っておきたいお金の話』 ・授業プリント ・新聞記事

(2) 生徒の実態と指導方針

多くの生徒が大学進学を志望し、日々の授業に対して前向きに取り組んでいる。公民科の学習に対しても苦手意識を持っている生徒は少数で、中学での学習内容についてもよく定着している。しかし、地歴科や公民科の学習は暗記中心という意識は根強く、資料やデータを根拠に意見を主張するなどの言語活動には消極的な生徒も多い。

以上のような生徒の実態を踏まえ、身近に起こっている社会的事象や素朴な疑問を題材として、主に新聞記事や『お金のキホン BOOK』（一般社団法人全国銀行協会編集・発行）を活用したペアワークを通して考察を深め、積極的に表現する態度・姿勢を育成する。



ペアで要点をまとめる様子

(3) 授業計画

学習内容・学習活動	支援・指導上の留意点	評価基準 評価方法
<p>【指導目標】 中央銀行の役割について理解する。</p> <p>【考察課題】 どうして紙幣を配布してはいけないのか？</p>		
<p>○日本銀行の役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料集 223 頁を参照し、3 つの役割について理解する。 <p>○政府の経済対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事(令和 2 年度予算は 3 次補正)を読んで 2020 年度の経済対策の要旨をペアでまとめる。 ・国債発行の仕組みについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・端的に解説し、問題提起につなげる。 ・ポイントを指示して読み取らせる。 ・発問しながら、端的に解説する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を読み、考えようとしているか。

<p>○中央銀行の金融政策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事を読んで、日本銀行の金融緩和策の要旨をペアでまとめる。 ・公開市場操作の仕組みについて考える。 <p>○インフレとデフレ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『知っておきたいお金の話』第6話を参照して、インフレとデフレについてペアで要点をまとめ、表を完成させる。 ・インフレの影響についての文章をペアで完成させ、口頭で説明する。 <p>○中央銀行のはたらき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事（金融緩和）を読んで、考察課題に個人で回答する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポイントを指示して読み取らせる。 ・発問しながら、端的に解説する。 <p>・『お金のキホンBOOK』14頁、『生活が豊かになるお金の運用』第1話も参照させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・回し読みの時間を確保する。Google Formsに感想を入力させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を読み、考えようとしているか。 <p>・両者の違いを理解できているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指定された語句を用いて意見を表現できているか。
--	--	---

(4) 新聞記事を活用した授業の成果



新聞記事を読んで課題に回答

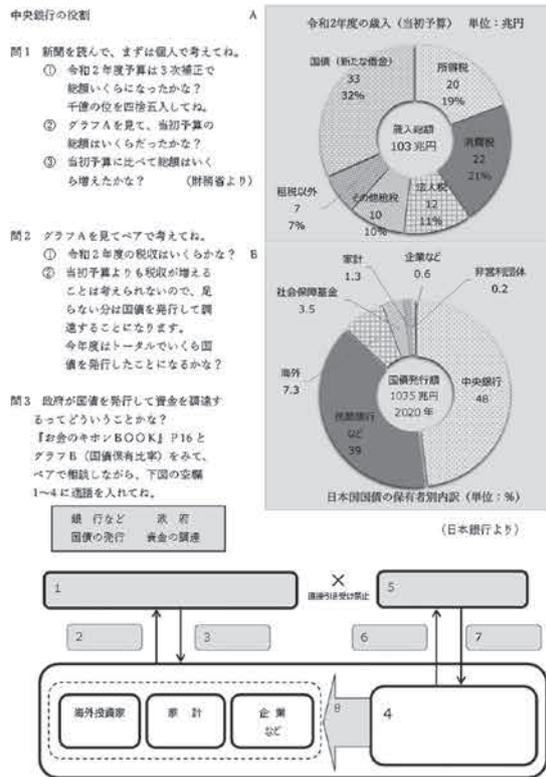
授業を実施した1年生のほとんどは、金融についての予備知識はほぼなしの状態であった。コロナ禍で起こっている社会的事象や身近な生活変化には非常に高い関心を持っているが、これらがどうして起こっているのかという問に対しては、適切な表現で説明できる生徒は多くなかった。

また、生徒は日常生活で新聞記事に触れる機会はほとんどなく、どうい

った内容の記事がどこに掲載されているかを理解している生徒はほとんどみられ

なかった。こうした状況を改善するため、年間を通じて授業中に記事を取り上げ、要点をまとめる課題を繰り返した結果、生徒は新聞が世の中の出来事を素早く手軽に知ることのできるツールであることを認識するようになった。

今回の授業では、金融に関する基礎データが豊富である『お金のキホンBOOK』と実際にリアルタイムで起こっている出来事を記事にした新聞を組み合わせることで、生徒が要点や問題点を素早く見抜く力が向上した。記事を教材に使用することで、生徒同士の学習活動も活性化した。



授業プリント



記事について話し合った結果を教員に報告

Ⅲ. 実践の感想と今後の課題

NIEの取組が3年目ということもあり、幅広い教科で新聞記事を利用した実践が行われた。情報が氾濫する世の中で、生徒が新聞の有用性に気づき活用する機会になったと考えられる。しかし、新聞があって当たり前であった教師の世代に比べ、意図的に新聞と関わりを持つ機会をこちら側から設定することが現在の高校生には必要であることを再認識した。

続 本校におけるNIEの取り組み

群馬県立吉井高等学校

教諭

高橋 寿郎

1 はじめに

昨年度に引き続き、今年度も本校がNIEの指定を受け、授業を通じて新聞を活用する取り組みを行うことになった。

ただ、今年度はご承知の通り、新型コロナ禍の中での取り組みということもあって、昨年度の方法をそのまま踏襲するわけにはいかず、どのように進めたらよいか正直悩んだ。生徒たちに新聞を通して何を読み取らせ、いかに考えを育ませていくか。悩みに悩んだ末、テーマについては昨年引き続き、新型コロナ禍にある中での「明るい話題」を取り上げさせ、新型コロナに関する記事が多い中にある中であつても、いかに「明るい話題」に関する記事に接することができるか、生徒たちに探させてみることにした。

なお、今回取り組んだ生徒たちは、地理Aおよび地理Bを選択した2・3年生である。

2 新聞を置くにあたり

昨年度は北校舎と南校舎の渡り廊下1階のスペースにある「コモンホール」という場所にデスクを間借りして新聞を並べて置いたが、今回も同じ場所に新聞を置くことにした。もともと昨年とは少し異なり、進路指導部の方でも新聞を3紙購読し、学校の休校期間が開けて再開すると、先行してその「コモンホール」に新聞を置き、その後10月から2カ月間、NIEとして新聞を置いたので、新聞の種類や部数はとても多くなり、また図書館にも新聞が置いてあることから、校内で新聞を目にする環境はとても充実することになった。生徒の新聞利用状況はというと、昨年度に比べ、利用する状況は増え、特に3年生が課題研究や受験準備に伴い、積極的に新聞を利用する様子が伺え、とても好感が持てた。



3 生徒たちの取り組み

今回も昨年に引き続き、生徒たちには「明るい話題」に関する記事を探させたわけだが、いざ新聞を手に取り目を通してみると、「明るい話題」に関する記事を探すのはなかなか大変で、苦戦を強いられていたようである。やはり新型コロナ禍にあつて、「暗い話題」が新聞を踊っている中で、しかもスポーツに関する明るい記事は今回も取り上げないように、あくまで教科である「地理」の分野に関する「明るい話題」についての記事に限定させたことから、探すのにかなりの時間を要した。以下に上げるのが、各新聞より今回探した「明るい話題」の記事の題である。

4 生徒たちが取り扱った記事の題名

[読売新聞]

- ・「デジタル円」実験へ
- ・平和賞に世界食糧計画
- ・原因 AI で解析、判定
- ・地域の公園 にぎわい再生
- ・医療物資の供給網強化
- ・今は忍耐 植物に学ぶ
- ・近場の魅力 再発見
- ・秋篠宮さま立皇嗣の礼
- ・ワクチン「9割超に効果」
- ・コロナ差別防止へ提言
- ・地銀再編へ政府が全面
- ・県内へ移住 コロナで増
- ・溶岩樹型 2112 もあった
- ・三井不動産 東京ドーム買収へ
- ・英、ワクチン数日内に承認
- ・無形文化財の保護強化

[毎日新聞]

- ・桐生和紙に魅せられて
- ・「本丸」残った外来ザリガニ規制
- ・CO2「50年実質ゼロ」
- ・黒人「も」同じ人間 当たり前
- ・80歳超え、アプリ開発
- ・待ち望んだゾウ
- ・川辺川のダム建設容認
- ・暑さに強いコメ初収穫
- ・また上を向いて 陸前高田震災後初の花火大会
- ・浅間山古墳・荒船風穴 国史跡に指定地追加
- ・GO TO 継続 政府強気
- ・電気を安全に届ける
- ・川辺川ダム建設へ転換

[朝日新聞]

- ・温室ガス「2050年に実質ゼロ」
- ・災害弱者の避難「個別計画」努力義務化し策定促す
- ・県相保護、毎日面会可能へ
- ・子ども食堂 大手支える
- ・24時間OK ICTで生ごみ回収箱
- ・海の草原 癒える傷
- ・神々と紡いだ生と死の物語
- ・川辺川ダム 容認表明
- ・ペットとともに
- ・あえて感染 ワクチン開発
- ・NYダウ3万ドル突破
- ・サンタ活動 コロナに負けたくない
- ・ひとり親世帯 再び給付金
- ・「核ごみ」拒否条例制定へ
- ・地域ブランド食品に新たな期待
- ・平和賞受賞の首相 強硬姿勢

[東京新聞]

- ・世界食糧計画に平和賞
- ・対越水堤防で決壊防げ
- ・日本国籍取得 動き加速
- ・チリ、新憲法制定確実
- ・感染させる人は2割以下
- ・大宅壮一文庫 開館50周年
- ・都、再び時短営業要請
- ・山手線「開かずの踏切」廃止
- ・おにぎり写真が飢餓を減らす



[日本経済新聞]

- ・コロナ禍で生んだ初共演
- ・平和賞に世界食糧計画
- ・再生エネルギーを主力電源に
- ・低品質ペットボトル再利用
- ・明治神宮 鎮座 100 年彩る大輪
- ・温室ガス「2050 年ゼロ」首相、所信演説で表明へ
- ・脱炭素へ税優遇
- ・カインズ、デジタル新施策
- ・コロナ禍でネット通販への移行も加速
- ・東ガス、発電所アジア展開
- ・医療機関へ補助拡充
- ・自分も卵も蒸気に包まれ
- ・岡山 対コロナで再起・街並み伝承生かし誘客
- ・三井不、レジャーで成長へ
- ・最強の生物
- ・伝統×デジタル新風
- ・近・づくワクチン実用化
- ・はやぶさ 2 最大のミッション 仕上げへ
- ・H2A 打ち上げ成功

[産経新聞]

- ・見えない人の買い物配慮を
- ・祭り・郷土料理 幅広く保護
- ・首里城再建 若きカベ
- ・ホンダ 自動運転レベル 3 発売
- ・新しい歴史の扉が開いた日
- ・温室ガスゼロ 税制で支援
- ・尖閣は戦わずして守れ
- ・厄介者・CO2 資源化
- ・訴訟不発のトランプ「国益第一」
- ・景気「持ち直し維持」11 月月例、
下振れ警戒

[上毛新聞]

- ・月の水かなり多い？
- ・風香り五感で堪能
- ・桐生消防本部「防犯ブザーで命救って」
- ・ブラックホール存在
- ・光の庭 花火満開
- ・温室ガス 50 年にゼロ
- ・オンラインで工場見学
- ・心のバリアフリー 全市に
- ・救急車 高速道路 完全無料に
- ・新型宇宙船「楽しみ」
- ・給食で郷土に誇りを
- ・川辺川ダム建設容認
- ・”米版はやぶさ”小惑星に
- ・町のため 熱意燃やす
- ・レストランの味 親子でゆっくり
- ・心の譜 八ッ場ダム建設再開
- ・マスクで緑 音楽の絆
- ・紅葉の白川郷 輝く水柱
- ・高渋バイパス 4 車線化年度内完了へ
- ・空き家改修 カフェ企業
- ・伊勢崎・境島村の養蚕製造民家 3 軒
登録文化財に
- ・バリアフリー情報発信 有志団体が呼
び掛け 障害者 安心の旅を
- ・県内公立小中 コミュニティースク
ール導入 7 校増え 44 校に
- ・キュウリ養液栽培成功



5 実際の取り組み

実際の取り組みについて、地理Bの選択している生徒が記入したものを、記事の題名、記事の要約、記事の感想の順に載せると次のとおりである。なお、新聞社名は略させて頂く。

(記事) 救急車 高速道路 完全無料に (上毛)

(要約) 救急車が高速道路を使用する時に完全無料にすることで、遠い病院に行った後に早く戻って、次の出勤に備えられる。

(感想) 次の出勤の準備を早くできたら今までよりも多くの人の命を救えると思う。

(記事) 祭り・郷土料理 幅広く保護 (産経)

(要約) 政府が地域の祭りや郷土料理などを無形の「登録文化財」として保護対象に加える方針を固めたことが10月19日に分かった。無形文化財には現在、特に重要なものを保護する指定制度があるが、ただ地域の祭りなどには担い手不足で存続が危ぶまれる例も多く、より基準が緩やかな登録制度で対象の幅を広げ、保護や継承の支援強化につなげる。

(感想) 日本には多くの祭りや郷土料理があるので、無形の登録文化財に登録されて良かったと思う。

(記事) ワクチン「9割超に効果」 (読売)

(要約) 米製薬会社ファイザーは独製薬会社ビオンテックと共同開発する新型コロナウイルスのワクチンについて、臨床試験で9割超の参加者に予防効果が確認された。深刻な副作用もなかったという。ファイザーのワクチンは免疫がつくことを狙っている。しかし、基本的にはデータ・効果持続期間などは未発表で不明である。

(感想) ワクチンがたくさんの人々の予防効果になることはとても良いことだと思います。記事にもある通り、安全性・有効性・持続期間についてはまだ不明と書いてあり、そこに関しては少し不安な面もあるが、厚労省は前向きな姿勢は崩してないということなので、少しずつこのワクチンの研究をし、なるべく早く世界各国で使えれば良いなと思いました。

(記事) 子ども食堂 大手支える (朝日)

(要約) 「子ども食堂」を大手企業が支える動きが広まって。新型コロナウイルスの影響で、オンライン開催で実施した。ファミリーマートは「ファミチキ」の調理の様子を紹介。日本ケンタッキー・フライドチキン子ども食堂への食材の提供を拡大する動きがあり、食品ロスも減らせるメリットがある。

(感想) 「子ども食堂」をみんなでサポートしようという動きが広がっていて、とてもいいことだと思います。まだ食べられるチキンを提供することで「ケンタッキー」はWin Winの関係を保つことができていると思いました。この流れに乗ってほかの外出チェーンが食材提供をして、サポートしてほしいと思いました。

(記事) 低品質ペットボトル再利用 (日経)

(要約) セブン&アイ・ホールディングスと三井物産は再生利用事業に乗り出す。難しかった不純物の混ざった低品質のペットボトルも再生可能になった。

(感想) 不純物の混じった低品質のペットボトルが再生可能になったことがすごいと思いました。再生するにはお金がかかります。あまり消費しないように一人一人がエコに協力したほうが良いと思いました。

(記事) 温室ガス「2050年ゼロ」首相、所信演説で表明へ (日経)

(要約) 日本は5年連続で温室効果ガスの排出量を削減している。首相が脱炭素社会を実現する具体的な時期を明示するのは初めてである。

(感想) 温室効果ガスの排出を2050年にはゼロにする目標を掲げているので、温室ガスの排出を抑えてほしい。

(記事) ”米版はやぶさ”小惑星に (上毛)

(要約) 米国版はやぶさとも呼ばれる探査機「オミリス・レックス」を小惑星ベンヌに着陸させた。日米で小惑星の岩石を交換予定。

(感想) 日本の「はやぶさ」のことはよくニュースで見たことありましたが、米国系の探査機のことには知らなかったのが初めて知りました。持ち帰った岩石を日米で交換するそうなので、どんな結果が出るのか早く知りたいです。岩石を調べることで、太陽系の成り立ちや生命の起源を知れるのはすごい技術だし、岩石だけでこんなにたくさんの情報が知れると聞いて驚いたし、すごいなと思いました。

(記事) レストランの味 親子でゆっくり (上毛)

(要約) 支援団体のNPO法人「イイコト」が11月22日にレストランの味を楽しんでもらいたいと親子を集めたランチ会を開いた。外食を遠ざけていた家族が参加し、持ち帰りスパゲッティや安心して行くことができることで、笑顔が広がり、喜んでいる人がいた。

(感想) 発達障害が理由でどこにも行けないのは、やはりおかしいと第一に思いました。そんな中での企画はすごく良いと思いました。子どもたちも楽しく行けた気分になり、レストラン側には今の障害児等への状況がわかり、多くのお店などが協力や支援に加わってくれるのではないかと思います。このような企画をもっと多くし、みんなが楽しく住める世の中にすべきだと思いました。

(記事) 川辺川ダム建設容認 (上毛)

(要約) 7月の豪雨で氾濫した熊本県。球磨川の治水策に関し、浦島郁夫知事は11月19日、支流の川辺川でのダム建設容認を県議会全員協議会で表明する。

(感想) ぜひ改善して欲しいと思いました。

(記事) 対越水堤防で決壊防げ (東京)

(要約) 昨年の台風 19 号で堤防決壊が相次いだことを受け、18 年前に撤回した対越水堤防の工事を、18 年ぶりに復活させる。川の水位を下げる対策を基本とし、決壊が甚大な区間で整備を目指す。

(感想) 水のパワーはものすごいと思うし、雨とかの対策をしっかりとやることは大切だと思う。18 年ぶりの工事復活も災害の対策ということでとても良いことだと思った。住む時に周辺の地域など起きそうな災害を考えていこうと思った。

(記事) 厄介者・CO2 資源化 (産経)

(要約) 厄介者扱いされている CO2 を原料や燃料として再利用する取り組みが加速し、新たな有望分野に育つと期待されている。

(感想) 地球温暖化の元凶である CO2 が燃料として変化し、役立つことに期待が高まった。しかし、CO2 の資源化「カーボンリサイクル」のネックが構造コストの高さであるため、技術開発プロジェクトの大半は実証実験段階で」とどまってしまうのは惜しいと思いました。

(記事) 海の草原 癒える傷 (朝日)

(要約) 岩手県大船渡市の越喜来湾・浪板海岸で海草のアマモが群生する「アマモ場」が回復しつつある。2016 年には台風やウニによる食害で 1500 平方メートルに減少したが、再び増えつつある。

(感想) 2011 年の震災の津波でほとんど流されたのに、地元のダイバーや漁師のおかげでまた増えてきていてすごいと思った。

(記事) 今は忍耐 植物に学ぶ (読売)

(要約) 新型コロナウイルスへの不安や閉塞感が広がる中、今年予定していた展覧会はコロナ禍で次々に中止・延期され、全国各地の教室は休講を余儀なくされた。そんな中、生け花で心を癒した。

(感想) 新型コロナウイルスの影響で、予定していた展覧会が中止になったのは残念だけれど、生け花をすることで勇気づけられたり、癒されるのはとても良いことだと思いました。

(記事) 三井不、レジャーで成長へ (日経)

(要約) 三井不動産は 11 月 27 日、読売新聞グループ本社と共同で東京ドームを買収すると発表。買収総額は約 1200 億円。複合施設開発」やテナント誘致のノウハウを生かし、ドーム周辺を一体化して家族連れで楽しめるボールパーク構想を推進する。

(感想) 三井不動産は東京ドームを買収し、手薄だったレジャー分野に収益源を広げることなので、東京ドームの周辺一帯がどのように変化していくのが楽しみです。また、巨人軍選手のグッズ展開や 5G を使った試合の演出が楽しみです。

(記事) 伝統×デジタル新風 (日経)

(要約) コロナによる打撃の中、京都府内ではオンラインショップなど、直接来なくてよくなるように取り計らい、ミッキーをプリントした和傘、バーチャル展示会による寺社仏閣の活用、バーチャル旅行で客を集めるなど With コロナにおける商機を取り込もうと奮闘している。

(感想) 古都たる京都も文化を生かし、今の状況の中でどうやって商品売ればいいのか、自分たちのよさを知ってもらおうとオンラインによる手段もとって商機を作ろうと奮闘し、落ち込んでもまた復活した強さに驚かされました。

(記事) 脱炭素へ税優遇 (日経)

(要約) 2050年までに温暖化ガスの排出量を実質ゼロにする目標に向け、政府・与党が検討する政策が判明した。温暖化ガスの削減につながる製品の生産設備への投資に優遇制を導入し、研究開発する基金も創設する。世界は環境をめぐる大競争に突入しているため、日本も国を挙げて技術革新や「グリーン投資」を推進して、次世代の成長につなげようとしている。

(感想) 再生エネルギー製品を使うこと事態が環境にとっていいことなので、良い制度だなと思いました。税を優遇させることで各事業が脱炭素に踏み出すきっかけとなり、連鎖していくのではないかと思います。政府がバックアップすることによって事業が参入しやすくなったり、研究・開発が進むと思いました。

(記事) 東ガス、発電所アジア展開 (日経)

(要約) 東京ガスと丸紅はベトナムで液化天然ガス(LNG)を燃料にする火力発電所を建設。環境負荷の小さいLNGは、再生可能エネルギーへの「つなぎ役」として期待を集めている。

(感想) 経済的に差があるアジアで新しいことをするとそれが注目されるので国にとっても良いことだと思った。石炭は温暖化ガスが多いし、数に限りがあるので、LNGを一般的に使用できるようになったらいいなと考えた。

(記事) ホンダ 自動運転レベル3 発売 (産経)

(要約) 国土交通省は11月ホンダの高級車「レジェンド」に対し、型式認定を行った。レベル3の車が型式認定されたのは世界初である。令和2年度内に発売される予定。政府はレベル3以上、完全自動運転を目指している。

(感想) 自動運転のレベルが上がることはいいことでもあるが問題もある。事故を起こした場合などだ。また、人間が運転しなくなると、どんどん人間のできるものがなくなってしまうので、完全な自動運転を開発するのはやめた方がいいと思う。それよりも人が運転して楽しいと思えるような自動車を開発してほしい。燃費のいい車も重要ではあるが、楽しい自動車も開発してほしいと思う。

(記事) 24 時間 OK ICT で生ごみ回収箱 (朝日)

(要約) 可燃ごみとして収集されるごみのうち、生ごみが約 4 割以上含まれている。そのため分別回収の方法などを検討する。その結果、市民が生ごみを 24 時間、365 日出せるように利便性を求める。生ごみ専用回収箱をつくることになった。高さ 142 cm、幅 60 cm、奥行き 65 cm の箱型の 6 基。その上内部には、生ごみの量を感知するセンサーが備えられ、さらに一定量を達したときは無線で知らせ、車両が向かう。この回収箱は「i-BOX」(アイボックス) と呼ばれる。そして他地域に利用できないよう QR コードが必要とされる。

(感想) 生ごみは私たちの生活でとてもやっかいなものなので、このように対策をしてくれると環境にも優しく、さらに利便性の向上にもつながるととても便利なものだと思います。ただ、この生ごみ回収箱は限られている地域しかないので、いつか全ての人たちに使えるように心から願っています。

(記事) H2A 打ち上げ成功 (日経)

(要約) 三菱重工業は 11 月 29 日、国産基幹ロケット「H2A」43 号機の打ち上げに成功したと発表した。種子島宇宙センターから午後 4 時 25 分に打ち上げ、約 30 分後に衛生を分離し、目標の軌道に入った。今回で H2A ロケットの打ち上げ成功率は 97.7% となった。阿部直彦防衛・宇宙セグメント長は「H3」に向け、1 つ 1 つリスクを潰していきたい」と述べた。観測衛星と地上の基地局を結ぶ場合に比べ、通信可能な時間を約 9 倍の 1 日平均 9 時間に延ばす。

(感想) ロケットを打ち上げるためには相当な人数が関わっていると思うので良かったなと思います。今までより私たちの生活や環境が良いものになっていくために技術が進化していくことはとても良いことだなと思います。次のロケット打ち上げするときも成功になるように頑張りたいです。

(記事) オンラインで工場見学 (上毛)

(要約) コロナ禍での新たな工場見学として、ウェブ会議システムを使い、学校と工場をつないで生徒がものづくりを学んだ。出張した社員が製造工程について動画やクイズで解説打音検査を体験した。

(感想) 新たな生活様式に対応されることが求められる院の社会で子供たちの特別な体験の場が減ってしまうことが危惧されていますが、オンラインサービスを使った体験をすることで少しでも特別な経験ができるように社会全体が取り組めるようにしたいです。

(記事) 風香り五感で堪能 (上毛)

(要約) 地方の鉄道が乗車記念として乗客に出す「鉄印」がブームになっている。秋ごろの時期には、電車で揺られながら紅葉を見ることができ、観光スポットの一種となっている。

(感想) 電車で揺られながら自然を感じることができるから、自然の豊かさを感じたい人や鉄道好きの人にとってはとても嬉しいニュースなので良かったです。

(記事) 心のバリアフリー 全市に (上毛)

(要約) 東京オリンピック・パラリンピック共生社会ホストタウンに登録された富岡市。誰もが安全で快適に利用できるように、優しいユニバーサルな施設に整備する。ユニバーサルデザインやバリアフリーを導入。そのほか市は、乗合タクシーの一部を車いすのまま乗れる車両にしたり、手話を言語として位置付ける手話言語条例の普及を図ったりする。障害の有無国籍、性別、年齢にかかわらず、誰もが生き生きと暮らせる社会」を目指し、公共施設のバリアフリー化を進め、パラリンピック種目を体験するなどの事前学習を続けてきた。これからも「共生の心」が市民により広く深く根付かせる取り組みを加速させていく。

(感想) 自分が住んでいる富岡で、このような活動が行われていることはすごいことだと思います。障がいのある海外のパラリンピック選手との交流を行い、共生社会の実現に向けた取り組みを推進するホストタウンとなったことは本当に良いことだし、このような体験はなかなかできないと思うので、とても良い経験になると思いました。今はコロナ禍の影響で、さまざまな交流はなかなかできないと思いますが、交流を通して様々なことが学べると思いました。

(記事) 無形文化財の保護強化 (読売)

(要約) 政府が地域の祭りや郷土料理などの文化の保存活用を強化するため文化財保護法を改正する方針を固めた。

(感想) お祭りや郷土料理が保護されれば存続の危機が回避でき、これからもその地域独特の文化が保護されるので良いと思います。後世に残していきたいです。

(記事) 月の水かなり多い? (上毛)

(要約) アメリカのチームが月に水がある領域は、想定よりも広く人間の飲料やロケットの燃料に使うことができると発表した。

(感想) 月にある水が人間の飲料になることはとても興味深いと感じた。まだわかっていない月の情報が解明されれば良いと思った。

(記事) 「デジタル円」実験へ (読売)

(要約) 日本銀行が中央銀行によるデジタル通貨の実証実験を 2021 年度に始めると発表した。中銀のデジタル通貨では中国が実用化に向けた準備を進めているが、日米欧でも将来的な発行を見据えた動きが活発になってきている。

(感想) 自分たちが紙幣の通貨を使っている中で、デジタル通貨の導入への取り組みが進んでいることを初めて知りました。デジタル通貨になることによって便利になる人も増加してくると思うが、高齢者などには難しいのではないかと思います。また、管理は楽になることはあっても、今までになかったような新たな犯罪なども増える危険性もあるのではないかと思います。日本でも実験が来年度から導入されるので、積極的に情報を集めてデジタル通貨がどんなものなのかを自分自身で経験してみたいと思いました。

(記事) 地銀再編へ政府が全面 (読売)

(要約) 金融を担当する麻生財務相は 11 月 13 日の記者会見で、地銀に対して経営改革を迫った。政府は 2021 年度にも経営統合などする地銀などに補助金を交付する制度を新設する。システム統合などの初期費用 3 分の 1 程度を補助する。

(感想) このコロナウィルスの時期に様々なお店や銀行が危機に追われている中、政府がしっかりと対応してくれるのはとても嬉しい事だと思う。これからも大変だと思うが、しっかり考えてがんばってほしいと思う。

(記事) 県内へ移住 コロナで増 (読売)

(要約) 新型コロナウイルスの影響によって首都圏から県外へと移住するひが増えている。テレワークを活用したオンライン相談会や自治体の PR を充実させ、移住促進を狙う。

(感想) 地方で過疎化が進み、かつコロナの影響で人の往来が制限される中で、首都圏から他県へ人が流れ、少しでも地方での経済を巡らせることができればいいと思う。

(記事) 秋篠宮さま立皇嗣の礼 (読売)

(要約) 秋篠宮文仁親王殿下が皇位継承順位 1 位になられたことを国内外に伝える国の儀式が行われた。

(感想) ひとつの血統で継承されている日本の天皇は世界一の歴史を持っているので誇らしいことですし、このような儀式では日本文化が集結されているので、関心を持つべきだと思います。

(記事) 医療物資の供給網強化 (読売)

(要約) 菅首相が就任後、初の外国首相との会談。医療物資のほか、防衛装備品の協定についても合意。安全保障への大きな一歩。

(感想) コロナウィルスへの対策、安全面の強化、どちらも安心できる内容だった。当然、発生源である中国が「世界の工場」と言われている通り、マスク等の供給を担っているわけであるが、そこが麻痺してしまっているのが、ASEAN の国々とサプライチェーンを結べたのは助かったと思った。会談後の菅首相のスピーチは格好良かった。

(記事) 桐生和紙に魅せられて (毎日)

(要約) 父が復活させた和紙工房で働く一人の女性。悩みは後継者がいないことらしいが、和紙づくりが好きに押しつける継承はしたくない。興味がある人に喜んで引き継ぐと語る。

(感想) このようなすばらしい技術が失われていくのはとてももったいないと感じました。早く後継者を見つけて後世に技術を残して行って欲しいと思いました。

(記事) 自分も卵も蒸気に包まれ (日経)

(要約) 明治新政府とのあつれきに疲れた西郷隆盛が3カ月逗留したことがある宮崎県の白鳥温泉。蒸気で蒸すことによって卵のみならず、人の身体も温まる。

(感想) 露天風呂の景色が良くてとてもいいなと思いました。宮崎県にある「白鳥温泉」ということで、コロナが落ち着いたらいつか行ってみたいと思いました。

(記事) マスクで縁 音楽の絆 (上毛)

(要約) 新型コロナウイルスの支援のため、中国の楽団へ日本少年少女オーケストラ協会がマスクを贈ったことをきっかけに交流を深めている。同国の電気自動車大手の社長である劉学亮さんが同協会に返礼として子供用マスク4千枚を寄付。来年2月には、同協会の子供たちが劉さんの長女でピアノを学ぶ沐雨さんと安中市で演奏会を開く予定。

(感想) 新型コロナウイルスの影響でいろいろなことが中止になりましたが、辛い思いをしているのは自分だけではないと協力して乗り越えようとしている気持ちがすばらしいと思いました。

(記事) 空き家改修カフェ起業 (上毛)

(要約) 桐生市に住む梶原奈未さん(22)が今月、同市錦町の曾祖母宅をリノベーションしてカフェを開業した。

(感想) 空き家で使われていなかった所を利用して、再びカフェとして人の集まる場所に利用しているのはエコにもなり、奈未さんの「私セカンドハウスを訪れた人のセカンドハウスになるように大事にしたい」という考え方も素敵だなと思った。またこのようなお店がもっと増えればいいなと思った。

6 ふりかえってみて

2年間にわたり新聞を授業に取り入れる授業を行ってきたが、今回も生徒たちはとても好意的に受け止めていた。普段の生活ではやはり忙しいためか、新聞を読む時間があまりないという声を聞いた。また生徒によっては、新聞を取っていなかったり、たとえ新聞を取っていたとしてもスポーツ紙であるため、一般紙を見ないという人もいた。

そのため、今回授業で新聞を読む機会があったのは、生徒たちには勉強にもなったし、何よりこの取り組みが楽しかったようである。今後も機会を見つけて、生徒たちに取り組みさせていきたいと考えている。



新聞を通して幅広い教養を身につけ 自分自身で深めることのできる生徒の育成

群馬県立高崎商業高等学校

1 はじめに

昨年度、長期社会体験研修として上毛新聞社で1年間研修に参加させていただき、そこでNIEに関する研修を受ける機会に恵まれた。多くのことを学ぶことができ、また学校現場で新聞を活用することの素晴らしさを再認識した。所属校に戻り本年度よりNIE実践指定校となった。本校は1学年280名、7クラス編成の専門高校である。伝統的に就職者の数が多く毎年40%～45%程度の生徒が卒業後すぐに就職している。そのため社会に出るためのモラトリウム期間がなく、社会情勢や地域に対する知識もあまり豊かであるとはいえない。早い段階から、幅広い教養や知識を身につけ、またそこから得た情報を分析し自分自身に適した就職先を知るために新聞を活用することにした。授業に関しては教科商業の「ビジネス情報」の授業を対象とすることにした。

2 実践の概要

(1) 購読計画と整理の方法

今年度は読売、朝日、毎日、産経、東京、日経、上毛の7紙を12月から4月までの間、配達していただいた。本校の商業科準備室に保管をし、新聞社ごとに閲覧できるようにした。日付順に整理をおこない該当の記事をすぐに閲覧できるようにした。

(2) 実践の内容

①授業の初めに毎回新聞記事を紹介した。本校はICT推進指定校となっており、一人一台のパソコンが支給されている。そのパソコンを活用し、Google社の「Google classroom」を用いて1か月間地元企業に関する記事をPDF形式で閲覧できるようにした。はじめは感想を求めず、まず読むことを目的とした。アンケートをとった結果、現在家庭で新聞を毎日読んでいる生徒が少なく、まず読めるようになることが肝要と感じたからである。最初のころは読むのに時間がかかり、わからない単語等が出て苦戦した場面もあったが、パソコンを用いているので検索してノートにまとめながら進め読む力を育てることに注力した。本校からの進路希望がある企業はもとより、多くの業種に対する知識を得るために生徒が普段あまり見ることの少ない業種にもスポットを当て紹介した。課題の提出はすべてオンラインで行った。

②1か月間紙面を見ながら興味のある会社1社に絞って研究をし、レポートにまとめた。項目は以下の項目を準備した。

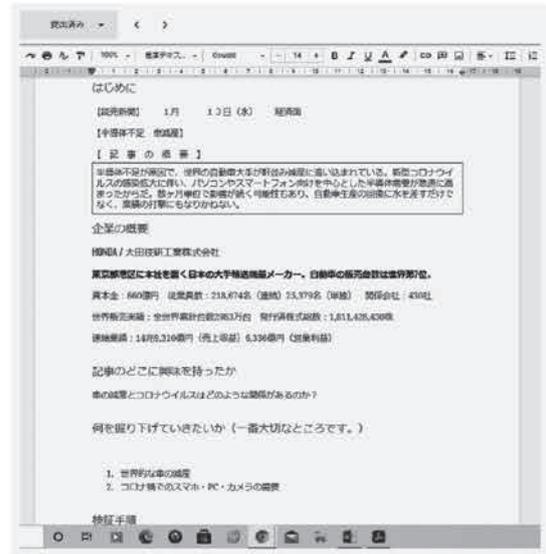
【 は じ め に 】

【興味を持った企業の記事】

【 見 出 し 】

- 【 記事の概要 】
- 【 企業の概要 】
- 【 どこに興味を持ったか 】
- 【 検証手順 】
- 【 データ 】
- 【 検証結果 】

新聞記事は必要な情報が精選され載っている。その中で興味を持った事柄をより深めていく形式のレポートとした。生徒が将来就業したい企業や業種を選ぶことが多く、今まで漠然とした思いで見ていた企業に対して関心を高めることができた。



提出されたレポート

③上記①、②により地元企業への関心やその他の教養が深まったところ合いを見て、商業科目「ビジネス情報」の授業において上毛新聞で1月に連載された「ニューノーマルに挑む」5回分の事前配布を行い、「コロナ渦における新しいビジネスの創出」という授業を行った。

ただ働くのではなく商業高校生として、将来主体的に働くためにどのようなにすればよいのかを考えることを目的として授業を進めた。

5人～6人のグループで現在の制限がある状態でどのような新しいビジネスが考えられるかブレインストーミングを用い意見を交換した。ブレインストーミングには Google の jam board を使用しお互いの班の意見をリアルタイムで共有しながら



授業の様子

ら行った。

意見をまとめた後は個人で意見をまとめプレゼンテーションを行った。自分とは違う考えに触れ大きな刺激となった生徒もいて、真剣に聞き入っていた。

地元群馬県で生徒の近所にある企業も特集されていて、生徒にとっては新しい発見も多く改めて地元目を向けるきっかけになったようである。



Jam board 実際の作業の様子

PDF で配布した記事



上毛新聞 2021/1/13



上毛新聞 2021/1/14



上毛新聞 2021/1/15

新聞を 読もう NIE

新聞を教育に活用する「NIE」の実践授業が15日、高崎市の高崎商業高校（岡野泉校長）で開かれた。日本新聞協会から「NIEアドバイザー」に認定されている林昭雄教諭が4年生約40人に新聞を使った授業を行い、コロナ禍で求められる新しいイベントやビジネスモデルを考えた。

同校は本年度、同協会が認定するNIEの実践指図校になっている。生徒は上毛新聞の連載「ユニーマルに挑む」を読む、非接触・非対面でのビジネスが重要な心構えを理解、班ごとに「オンラインマーケティング」「イベント企画」などの新しいビジネスを考案した。

山本華鈴さんは「オンラインを使った無人販売提案」「ドローンを使えば家庭に届けられる、記事を読んだ今までの論議にとらわれず、社会的変化に対応する力が大切だと感じた」と話した。

同校は、生徒が1人1台のパソコンを使う環境を揃える「GIGAスクール構想」で校内のモデル校になっており、生徒はパソコンでPDFファイルの紙面を読み、リアルタイムで意見共有していた。写真。

上毛新聞社は出前講座を希望する学校・企業・団体を受け付けています。問い合わせはNIE・NIB推進事務局（0274・254・9000）へ。

記事基に新たな ビジネスを考案

高崎商高で実践授業



3 考察と課題

授業後に生徒に行ったアンケートでは「新聞は難しいイメージがあったが、読み進めていくとわかりやすく面白い」や「毎日読むことにとって初めての文章に対する苦手意識が少なくなった」、「それぞれ興味がある記事を選んだ時にみんなの考えが自分とこんなに違うんだと知ることができた」などの声があがった。また授業後にも、継続して新聞を読む生徒が増え一定の成果が上がったと考えられる。商業高校生として早い段階から理論だけでなく、実際の経済社会で起きている事象にアンテナを張ることの重要性にもきづいた生徒も多かった。授業はおおむね好意的に取り組んでくれた。

本校の生徒はほぼ全員がスマートフォンを所持しインターネットを中心に情報を得ている。自分自身が興味ある内容を中心に目を触れることが多く、またソースが不確かな情報をそのまま信じてしまう生徒もいた。本校は本年度初めて実践指定校として取り組んだが新聞を教養を広げ、見識を深めるきっかけに使うツールとして活用することができた。本年度の実践は2年生のビジネス情報科の生徒を中心に行ったが、来年度は1年生や3年生にも取り組みを広げ、学年ごとに必要とされる内容を提供し、新聞の大切さを知ってもらいたい。今後も新しい指導法を研究し、よりよい教育実践を行えるようにしたい。

【これまでの実践校】

- ◆2004年度 笠懸中、万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2005年度 万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2006年度 伊勢崎境剛志小、伊勢崎境西中、太田東中、西邑楽高、富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中
- ◆2007年度 富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中、高崎西部小、太田沢野中央小、太田生品中、沼田小
- ◆2008年度 太田沢野中央小、太田生品中、沼田小、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、館林高定時制
- ◆2009年度 太田生品中、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、板倉北小、前橋元総社中、太田高
- ◆2010年度 太田生品中、板倉北小、前橋元総社中、太田高、桐生新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高
- ◆2011年度 板倉北小、新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高、高崎城東小、太田西中、太田強戸中
- ◆2012年度 前橋原小、高崎片岡小、伊勢崎豊受小、千代田東小、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、館林商工高
- ◆2013年度 前橋原小、伊勢崎豊受小、千代田東小、高崎高松中、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、昭和中、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2014年度 群馬大附属小、伊勢崎豊受小、高崎高松中、太田西中、沼田南中、昭和中、藤岡中央高、西邑楽高、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2015年度 群馬大附属小、高崎南小、桐生川内小、太田西中、沼田南中、館林四中、甘楽二中、藤岡中央高、西邑楽高
- ◆2016年度 高崎南小、桐生川内小、昭和東小、館林四中、甘楽中、前橋富士見中、高崎一中、沼田南中、太田西中、西邑楽高
- ◆2017年度 昭和東小、沼田利南東小、高崎新高尾小、桐生相生中、太田東中、前橋富士見中、高崎第一中、沼田沼田南中、尾瀬高
- ◆2018年度 高崎新高尾小、沼田利南東小、太田東中、桐生相生中、高崎大類中、孺恋中、沼田薄根中、伊勢崎高、尾瀬高
- ◆2019年度 沼田利南東小、館林八小、高崎大類中、高崎一中、沼田薄根中、孺恋中、ぐんま国際アカデミー中高等部、伊勢崎高、吉井高

群馬県NIE推進協議会会則

(名 称)

第1条 本会は群馬県NIE推進協議会とする。

(目 的)

第2条 本会は群馬県の小・中・高等学校等におけるNIEに関する研究を推進するとともに、会員相互の研さん、親ぼくを図ることを目的にする。

(事 業)

第3条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を実施する。

- ①NIE実践校、実践者を選考し日本新聞教育文化財団への推薦
- ②NIEに関する研究会等の開催
- ③NIE実践校、実践者に対する補助
- ④NIE実践、研究の成果の紹介と普及
- ⑤目的の合致する他の団体との協力、連携
- ⑥その他、本会の目的達成上、必要と認められる事項

(構 成)

第4条1項 本会は次に掲げる者で構成する。

- ①学識経験者
- ②群馬県教育委員会代表
- ③学校代表
- ④朝日、毎日、読売、産経、日経、東京、上毛の新聞各社と共同、時事通信社の代表

2項 会員の任期は1年とし、再任を妨げない。

3項 本会には顧問を置くことができる。

(役 員)

第5条1項 本会は次の役員を置き、総会において会員の中から互選する。

- ①会 長 1名
- ②副会長 若干名
- ③幹 事 若干名
- ④監 査 2名

2項 役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

(任 務)

第6条 役員の任務は次の通りとする。

- ①会長は本会を代表し、会務を総括する
- ②副会長は会長を補佐し、会長が欠けた場合にはその職務を代行する
- ③幹事は会務を処理する
- ④監査は本会の会計を監査する

(運営・総会)

第7条1項 本会は事業計画、その他会の運営に関する事項を決定するため、年一回の定期総会開催と、会長が必要と認めたときに臨時総会を開くことができる。

2項 総会は次の事項を審議、決定する。

- ①会則の制定、改正
- ②予算、事業計画
- ③会務、決算報告
- ④役員を選出
- ⑤その他、会長、会員が必要と認めた事項

3項 総会は会長が議長を務める。

(経 費)

第8条1項 本会の運営に関する経費は、加盟する新聞社、通信社からの会費をもって充てる。その他、団体等からの寄付金、補助金も受けることができる。

2項 会費は当面の間、新聞社月額5千円、通信社月額2千5百円とする。

(事業年度)

第9条 本会の事業年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。ただし、設立当初の事業年度のみ、平成16年6月21日から同17年3月31日までとする。

(事務局)

第10条 本会の事務局は当面の間、上毛新聞社内に置く。

(付 則)

本会は平成16年6月21日から実施する。

2021年5月31日発行

2020（令和2）年度

群馬県N I E実践報告書

編集 群馬県N I E推進協議会事務局
発行者 群馬県N I E推進協議会
事務局 〒371-8666 前橋市古市町1-50-21
上毛新聞社内
電話 027-254-9933（編集局代表）
